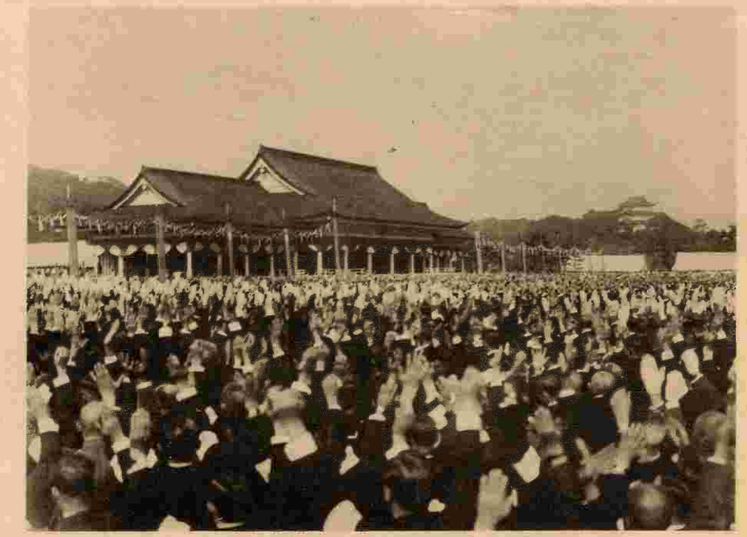
片倉製絲紡績株式會社

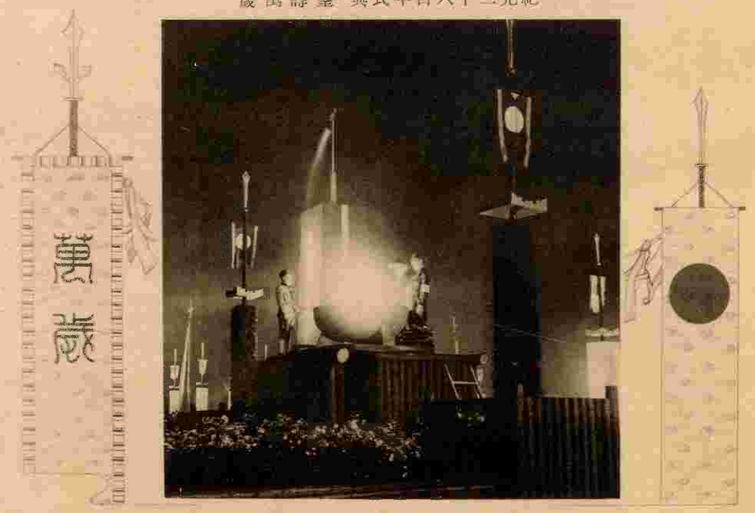
創立二十年紀念寫真帖

片倉製絲紡績株式會社

創立二十年紀念寫真帖



紀元二千六百年式典　聖壽萬歲



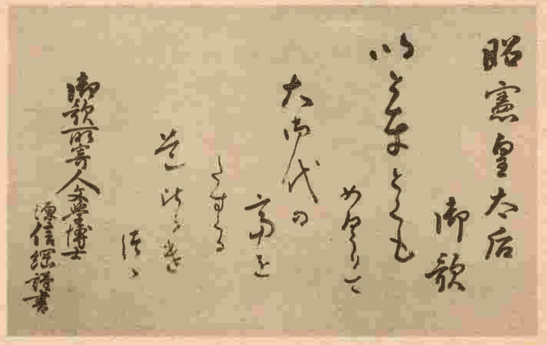
馬場先門奉祝塔

我社の光榮

大正九年十月十五日

畏くも

皇后陛下には官幣大社氷川神社御參拜の御祠當會社大宮製絲所に行啓遊ばされ特に社長片倉兼太郎、副社長今井五介に拜謁仰付けられた。次いで副社長御先導申上げ工場御巡覽微細に亘りて有難き御下問を賜はり、社長職員職工一同に御下賜品を賜りたるは誠に光榮とする所である。



明治六年富岡製絲所行啓の詠歌

大正九年十月十五日
皇后陛下大宮製絲所行啓

目次

紀元二千六百年式典……寫眞　一葉
我社の光榮……寫眞　二葉
序文
本社……寫眞　一葉
社旗……寫眞　一葉
社歌……寫眞　一葉
創立二十年紀念式……寫眞　二葉
片倉組時代……寫眞　一九葉
片倉製絲紡績株式會社
役員……寫眞　二七葉
本社職制……寫眞　一一葉
出張所……寫眞　九葉
試驗所……寫眞　七葉
我社の事業
蠶種製造及養蠶……寫眞　一七葉
生絲製造及檢査……寫眞　二五葉
我社の製絲工場
信州地方……寫眞　二二葉
關東地方……寫眞　二一葉
東北地方……寫眞　二七葉
中部近畿地方……寫眞　一三葉
中國四國地方……寫眞　二五葉
九州地方……寫眞　二八葉
朝鮮……寫眞　九葉
蠶種製造所……寫眞　一八葉
工場生活……寫眞　二七葉
其の他……寫眞　九葉
圖表……三枚
事業概要

序

畏くも　本年二月十一日紀元節の佳辰に當り大詔を渙發せられ皇國創業の大理想を新にし和衷協力愈々國威の發揚に努む可き御叡慮を拜し國民は誠に恐懼感激、倍々時艱克服に邁進し、世界新秩序の建設に不退轉の覺悟を定め、以て聖恩に應へ奉らねばならぬ。

茲に光輝ある紀元二千六百年に際會し、恰も我社は創立滿二十年を迎へ片倉組創業以來六十有三年を閲した。顧れば明治十一年我國蠶絲業搖籃の時代天龍河畔に渺たる小工場を興してより、春風秋雨幾星霜、創業時の困難と幾多の波瀾曲折に遭遇し、將又競爭纖維の發達等幾多の難關を克服し、荊棘の道を切り拓き克く今日あるを致した。惟ふに我社業伸展の歴史は我國蠶絲業發展の反映であり、聊か邦家の爲貢獻し得た事は欣快に堪へぬ所である。

今や世界の新狀勢に伴ひ建國創業の大理想を具現せんとする秋我蠶絲業も亦再編成の下に產業報國の誠を致さんとして居る。

茲に皇紀二千六百年と我社創立二十年を記念し先人の遺業を偲び以て蠶絲奉公の覺悟を新にし新時代に處する爲、沿革の寫眞帖を編錄して社員及關係者各位に頒たんとする次第である。

昭和十五年十二月

片倉製絲紡績株式會社

取締役社長　今井五介

本社全景

今や産業の新秩序は世界の新興諸国を処理するに一大センセーションを惹起する状態を呈せんとしつゝあり

再興成の下に産業振興の業を興さんとしつゝあり

当社は紀元二千六百年を期し立ち上がるとともに入の産業を掲げ以て産業界

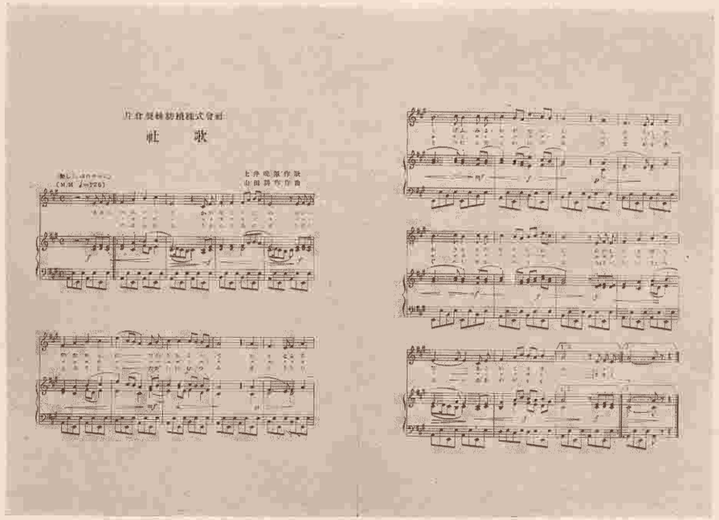
公の福祉を増進し高度国防国家の建設に資する目的を以て産業報国

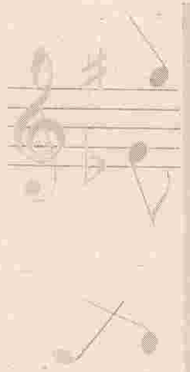
の理念を具現せんとする次第である

昭和十五年十二月

東洋産業株式会社

代表取締役社長　今井五介





社歌

第一節

旭日の御稜威と
無形い寶に
おもなる產業
天職高きを
充たして希望に

第二節

信濃の高原
日本の四方に

躍く邦の
光を浴へて
見よわが製絲
おの〳〵胸に
溢れて進め

進みて大海
隈なくいやます
片倉製絲の

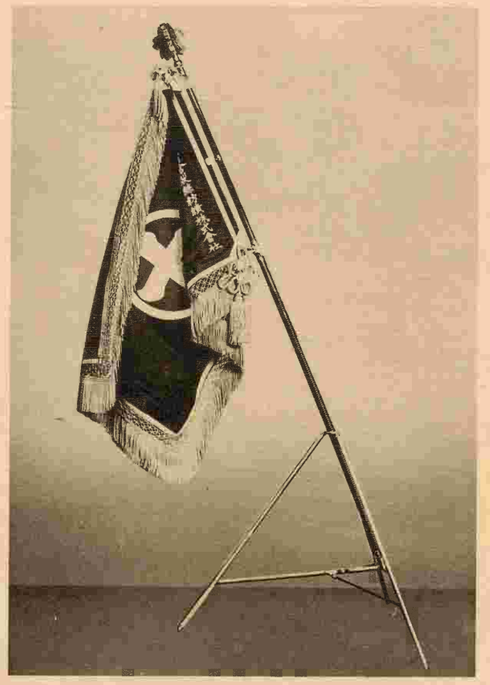
第三節

數萬の同胞
資本と勞働
誠をひとつに
學を揚ぐべし
共存共榮

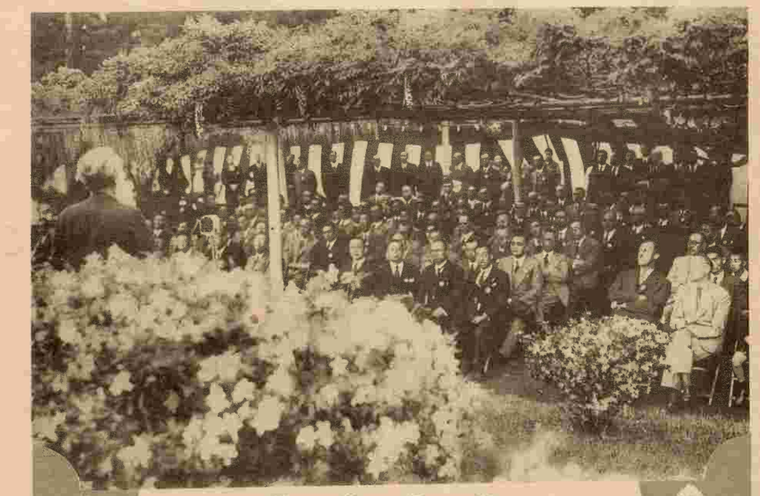
波まくあなた
あゝわが事業
名にこそ驚れ

力を合せ
互に聽み
不斷の勵み
世界の上に
あゝわが理想

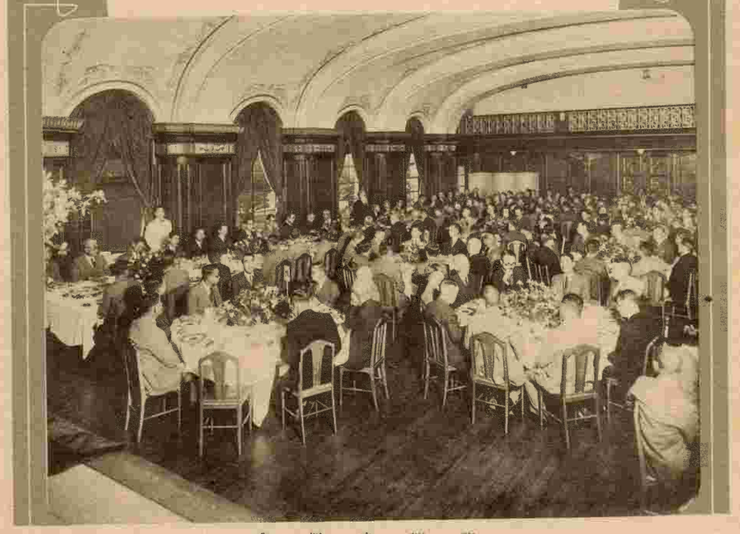
社歌



片倉製絲紡績株式會社々旗



社長挨拶



祝賀晩餐會

創立二十年祝賀會

本社主催の創立二十年祝賀會は五月四日大宮製絲所に於て開催された。新綠の芝生を點綴する躑躅の色とりどりに美しく、若葉の香匂ふ庭園の園遊會には多數朝野の名士を招待し簡素乍ら極めて盛大に行はれ今井社長より一場の挨拶が行はれた。

横濱出張所に於ては五月八日ニューグランドホテルに關係者を招待して祝賀會を開き各工場共夫々祝賀の行事を行つた。

白倉組時代

故初代　片倉兼太郎翁

故片倉光治翁

故片倉俊太郎翁

故林利三郎翁

創業當時の帖簿と商標

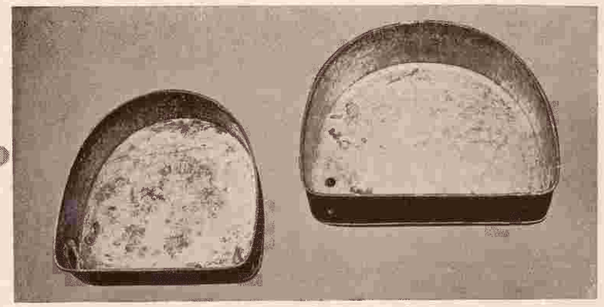
垣外製絲場の創立

明治十一年六月初代片倉兼太郎と次弟光治共同の下に創設された垣外製絲場は僅か三十二釜の器械製絲であつた。當時の從業員は唯の三十四名であつて創業の年における生絲製造高も僅六八九斤に過ぎなかつた。之等の生絲を販賣する爲めに深澤社を組織し上記の商標を附して共同出荷を行つた。翌十二年同志と相諮り開明社を組織して共同荷造を開始し生絲品質の統一を計り同十七年六月には共同揚返場を設置した。開明社設置後は開明社垣外製絲場と稱したので深澤社なる名稱と商標は僅か一年餘り使用されたに過ぎなかつた。

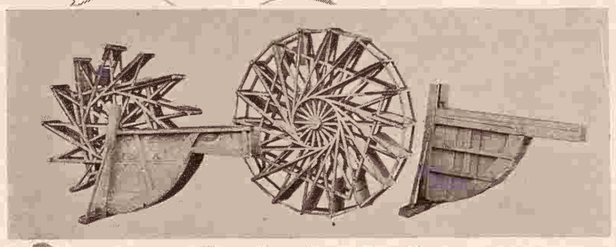
垣外製絲場は大正六年に至り廢止され其の跡は現在の川岸事務所となつた。

創業當時の製絲法

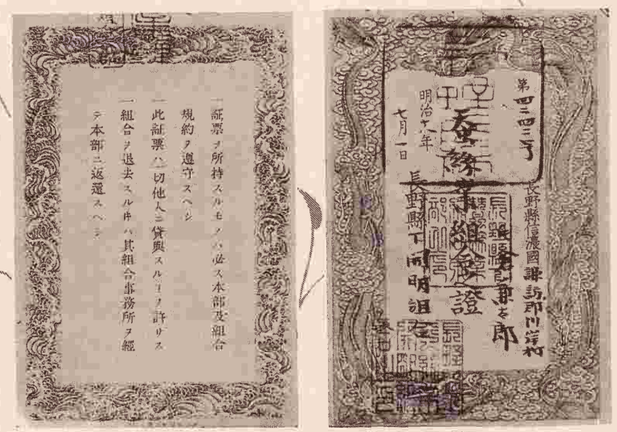
當時の製絲法に就いては據る可き記錄が無いので明瞭で無いが動力としては水車を用ひ煮繰兼業浮繰法でケンネル式二緒繰りであつた。簡單なボイラーを据へ付け薪を焚いて蒸汽を起し繰絲鍋にのみ用ひた。繰絲鍋は一般に銅製が使用されて居たが其の頃伊奈赤羽根にて陶器鍋が始めて製造されたので垣外製絲場は率先之を使用した。當時は一人一日の能率は僅かに三〇匁—三五匁に過ぎなかつた。原料繭の品質、製絲法共に偉大な進歩を遂げた今日より見れば實に隔世の感無きを得ない。



銅製繰絲鍋



動力用水車



一証票ヲ所持スルモノハ必ス本部及組合規約ヲ遵守スヘシ
一此証票ハ一切他人ニ貸與スルヿヲ許サス
一組合ヲ退去スル時ハ其組合事務所ヲ經テ本部ニ返還スヘシ

第四三三号
明治十年七月一日
長野縣信濃國諏訪郡川岸村
長野縣士族
垣外清兵衛
右之者ヲ組合員ニ相違無之候也
長野縣士族
垣外明組

蠶絲業組合員證（明治十八年）

開明社片倉組看板

明治三十年頃の垣外製絲場

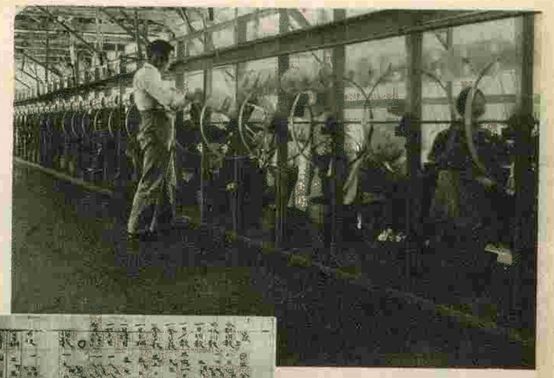
片倉組の組織

垣外製絲場は明治十四年新宅片倉俊太郎の經營する製絲を合同して六〇釜と爲し、本家兼太郎、新宅俊太郎、新家光治の片倉一族共同し各々の持分を定め一意專心事業の繁榮を圖つた。明治二十三年に至り始めて松本に製絲場を起し片倉清水製絲場と稱し米國より新歸朝の今井五介之が經營に當つた。二十七年には川岸村に㊀三全社を起して事業の擴張を行ひ翌二十八年片倉組を組織して事業の基礎は愈々不動のものとなつた。時に設備釜數八百七拾六釜。同年には早くも東京京橋和泉町に東京支店を設置して全國へ雄飛の態勢を整へ明治三十年以後續々と製絲工場を新設した。

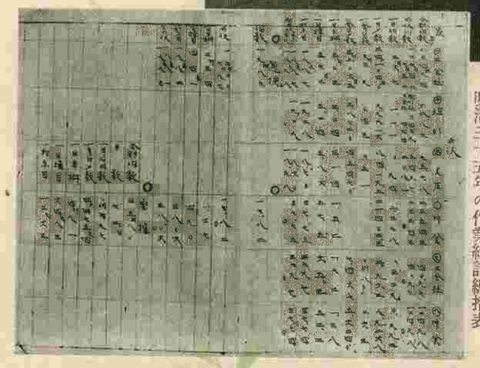
明治後期

明治三十年代に入つてから繰絲法も稍進み煮繰兼業浮繰であつたが緒數も三緒繰となり、コルニツシユボイラーも設備し三十三年頃よりは繰絲枠、再繰枠共蒸汽暖管を以て乾燥を行ふ樣になつた。此の頃には諏訪地方の製絲業は愈々振盛となつて各地に職工爭奪戰を演出し解決策として明治三十四年には彼の有名な製絲同盟規約が締結された。

明治三十五年には片倉組の工場は垣外、川岸、松本、下諏訪、大宮、八王子の六ヶ工場となり、各工場毎に明確なる作業統計が作製され計數的資料に基く經營が行はれて居た。斯樣に萬事正確な統計に基礎を置く經營法が片倉組の事業發展上大いに役立つたのである。



明治三十五年三枠繰絲の狀況



明治三十五年の作業統計總括表

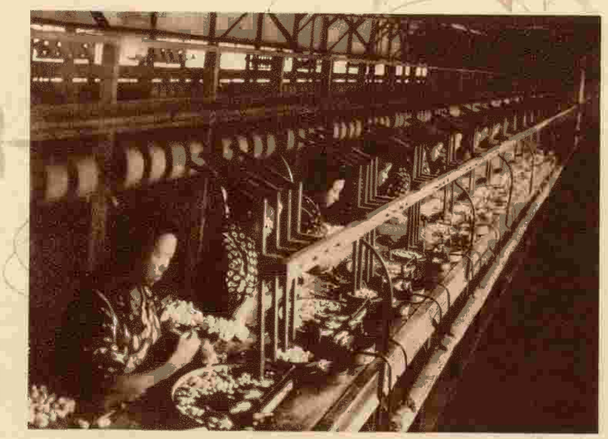
明治四十年頃の八王子製絲所事務所

片倉組の繰絲法

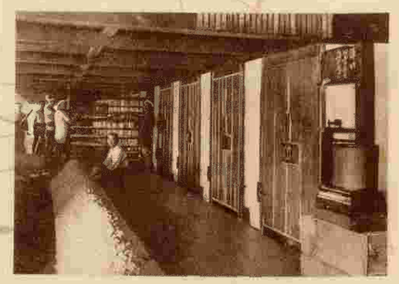
明治の末葉から大正時代にかけて片倉組の發展は實に目覺ましく我邦經濟界進展の波に乘つて內地は勿論朝鮮に迄事業を擴張し大正九年株式組織に變更の際は十九ケ工場一萬一千餘釜の設備となつた。

片倉組に於ける製絲法は信州式の代表とも言ふ可きもので信州上一番格繰絲を主體とした。即ち稻妻ケンネル式煮繰兼業淦繰法であつて絲目と繰目の增收に主力を置いて居た。然し乍ら大正中期より煮繭機の實用時代に入り繰絲技術の變革を齎すと共に一方生絲需要の變遷に伴ひ逐次優良品製造に方針の轉換を見た。現在に於ける設備は我製絲業界に誇る新鋭御法川式多條繰絲機に統一され優良格生絲の製造に獨特の地歩を築いた。

明治四十年頃の生絲整理室



大正初期に於ける信州上一番格繰絲

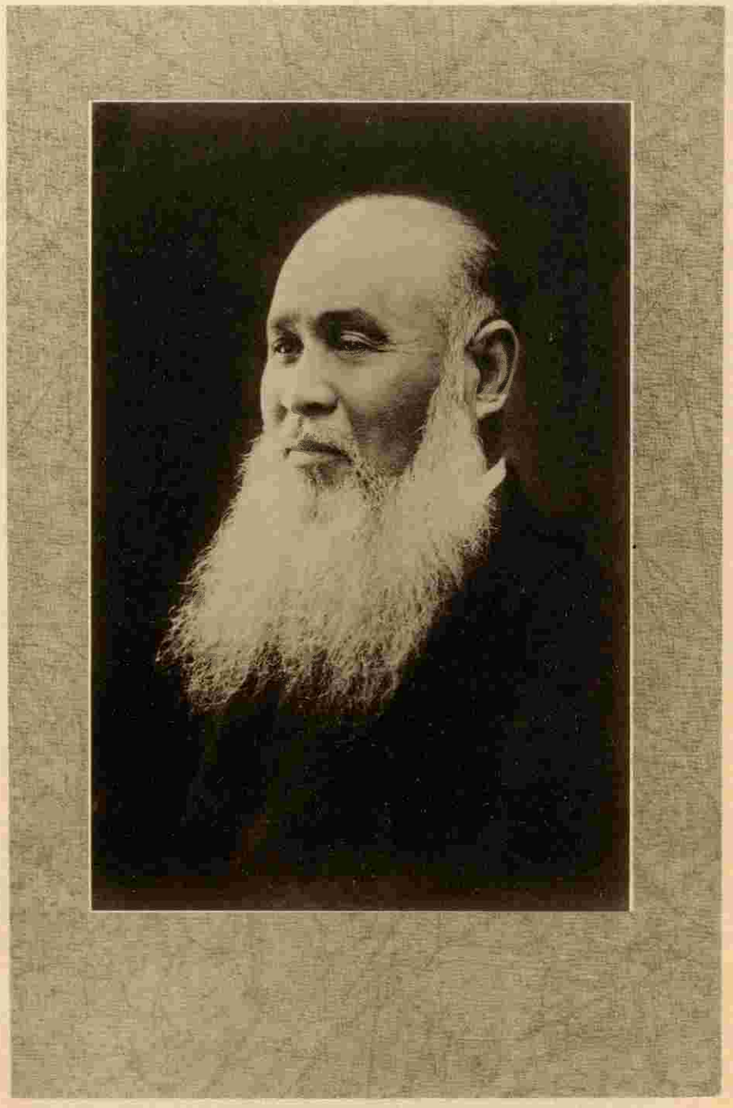


米國式乾燥機

片倉製絲紡績株式會社

役

員



前社長
前取締役會長
故二代　片倉兼太郎翁

取締役會長　三代　片倉兼太郎

取締役社長　今井五介

取締役副社長　片倉勝衛

常務取締役　片倉武雄

取締役 武井覺太郎

取締役 片倉直人

取締役 林 清夫

取締役 野崎熊次郎

取締役 片倉方平

取締役 中澤正英

六 五井今 役締取

二 清橋根 役締取前 役査監任常現

一 金澤尾 役査監

前取締役　田中新之助

前取締役
元監査役　櫻澤鶴吉

前取締役　森谷彦太郎

前取締役　山中　遜

前監査役　今井俊藏

故取締役　尾澤福太郎

故取締役　今井眞平

故取締役　澤唐香三

故監査役　飯島保作

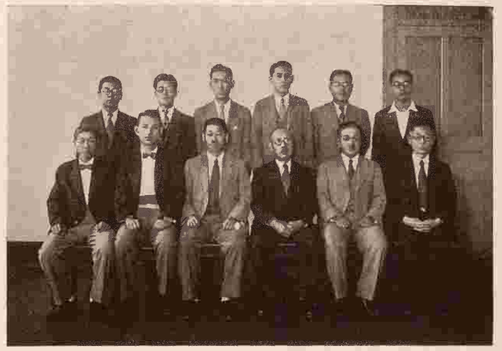
故監査役　安田善雄

故監査役　土橋源藏

故常任監査役　小口友龜

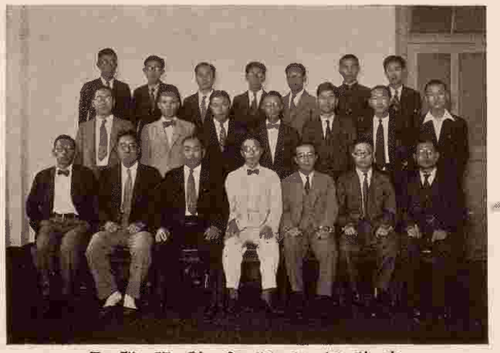
故監査役　黒澤剛

本社職制



本社經理部庶務課職員

片倉健保康組險合本部職員



本社經理部會計課職員

本社工務部職員

本社原料部蠶業課職員

本社販賣部職員

本社原料部原料課職員

本社秘書課職員

本社絹製品部職員

本社考査部職員

本社監査部職員

出

張

所

川岸事務所

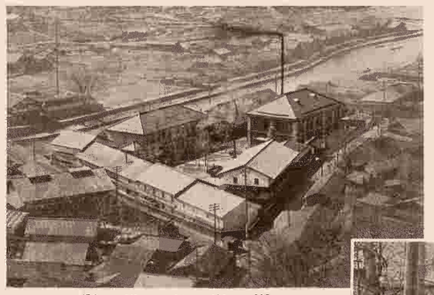
長野縣諏訪郡川岸村

當所は明治四十三年垣外製絲場構内に設立され片倉組事務所と稱し活版部を併設して片倉組本部の事務を扱つた。大正九年片倉組の組織變更により株式會社となりたる後は逐次本部の事務を東京本社に移管した。現在は主として内地販賣の機關となり國用絲副蠶絲等年販賣高二千萬圓以上に及ぶ。附帶事業として能登舟分工場（普通繰絲機九〇釜）醬油部、私立片倉青年學校、其の他の經營を行ふ。

大阪出張所

大阪市東區北濱町二丁目九〇番地

大正十一年一月西區京町堀上通り一丁目三八番地に設立された。業務は關西、九州方面の工場と東京本社との連絡事務を主とし工場用度品の購買、及金融の一部をも掌つて居る。大正十四年春現在の地に移轉した。現在所員十一名である。



川岸事務所

同上職員

同能登舟製絲所職員

大阪出張所

同上職員

横濱出張所

横濱市中區本町四丁目三八番地

大正十年六月十五日横濱市山下町一九八番地に設立され當初は從來茂木商店扱になつて居た我社七工場の生絲を直營販賣とした。是我國に於ける製絲業者直營販賣機關の嚆矢であつた。大正十二年の大震災には建築物全部倒潰し所長岡田久次郎以下十六名の殉難者を出し、在庫生絲は全部燒失した。然し乍ら我社は之に屈することなく九月十七日には露絲貿易復興會事務所内に於て營業を開始し、十五日には神戸市に出張所を設けて我國最初の製絲家直輸出を開始した。翌十三年二月直輸は横濱一港主義に本社の方針決定し神戸出張所は廢止され同五月には燒跡に假建築を以て設備一切を復興した。昭和五年三月現在地に本建築の竣工と共に移轉し、其の後極めて順調に伸展して創設當時僅か八名であつた所員は昭和十三年には一六〇名に及び、生絲入荷量は横濱總入荷數の二割五分强を占め、輸出數量は年七萬餘俵を數ふる盛況となつた。

横濱出張所

同上職員

紐育出張所

ニューヨーク市マヂソン街二〇〇番

大正十二年九月關東大震災により横濱港の貿易杜絶するや我社は同月二十七日社員を派遣し生絲の直輸出販賣機關として紐育出張所を設置した。其の後昭和九年二月片倉**エンド・コンパニー・インコーポレーテット**に改め更に歐州市場へ進出の爲同年一月佛蘭西國リヨン市モレール・ジユルネル商會を當社代理店とした。

上海出張所

中華民國上海九江路

昭和十四年六月支那生絲の輸出を行ふ爲め上海出張所を設置した。

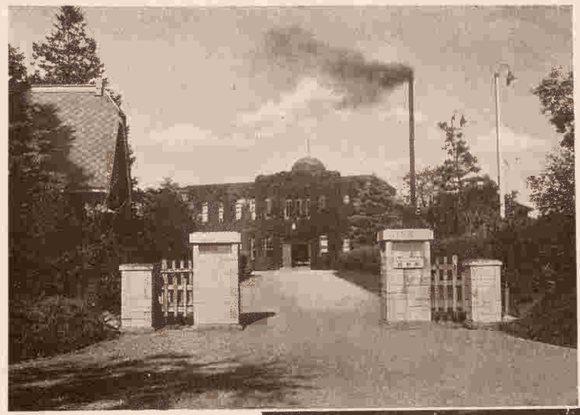
紐育出張所職員

上海出張所

試

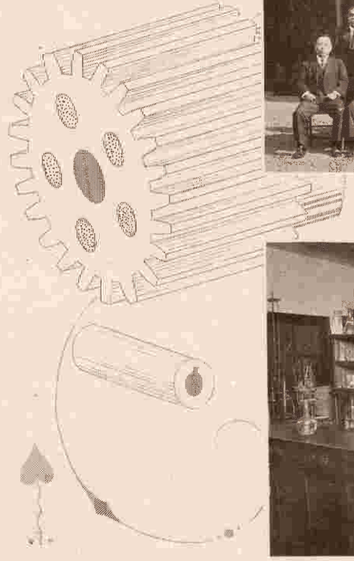
驗

所



大宮試驗所

同上職員



同上第一化學室

試驗所

大宮市大字大宮

昭和二年四月一日研究所として開設され製絲に關する一般研究設備の他化學實驗室、養蠶實驗室を附設し教婦養成を兼ね行つた。昭和六年六月講習所と改稱し更に同八年試驗所と改められ益々內容の整備擴充を計つた。同年には製絲研究室、再生絹絲實驗室、化學實驗室、應用化學實驗室を新增設し、九年には㈱式自働繰絲機を設置研究に着手し、絹絲加工實驗室を新設した。十年には撚絲製織實驗室、第二加工實驗室、集緒器檢査室、十一年には蛹油抽出實驗室を新設した。更に十三年にはシルクブロック部工場を新設して我社發明の絹歯車、ローラーパッキング等シルクブロック製品の製造を開始した。同所の主體たる製絲技術の研究は完備せる研究施設と絶えざる努力により我社獨特の製絲法を完成し斯界に覇を遂げたのである。

蠶業試驗所

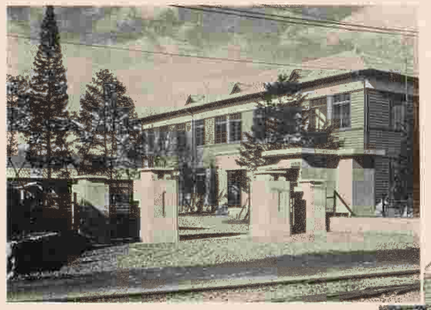
松本市大字筑摩

當所の前身は普及團試驗部であつて大正四年十月設立され昭和二年六月農林大臣より學術研究の爲蠶種製造並に蠶兒飼育の許可を受けた。其の後事業の進展により昭和五年七月蠶業試驗所として獨立した。現在伊豆松崎、諏訪郡川岸村、鹿兒島縣川尻、沖繩縣の四ヶ所に出張所を持ち創立以來幾多優良蠶品種の選出に成功して我國蠶絲業界に多大の貢獻を爲した。

栽桑試驗所

東京府南多摩郡川口村

昭和五年五月栽桑に關す學理及應用方面の專門研究を行ふ爲我國唯一の栽桑試驗所として設立せられ同年七月事業を開始した。設立以來合理的桑園經營法、桑樹栽培に關する新研究、桑葉の葉質と蠶作、及繭質との關係等幾多貴重なる研究を完成して居る。



片倉蠶業試驗所

同上職員

片倉栽桑試驗所

同上職員

我社之事業

蠶種製造及養蠶

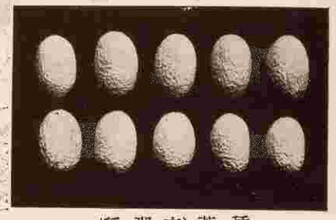
蠶品種の改良

近年我國原料繭の品質及絲量歩合は勿論蠶作の安定にも驚異的進歩を遂げた。是が原因は蠶品種の改良に負ふ所甚だ多いが就中一代交配蠶種の普及を以て其の第一とすべく今日蠶種と言へば即ち一代交配種を意味する。

我社は大正三年大日本一代交配蠶種普及團の設置以來孜々として研究を續け、幾多の困難と犧牲を克服して遂に今日の如く一代交配種絶對の時代を齎し、又滿月、豐白等の如き多絲量品種、分離白一號等の如き幾多の絲質優良なる品種を選出して我邦蠶品種の改良に偉大な効績を殘した。

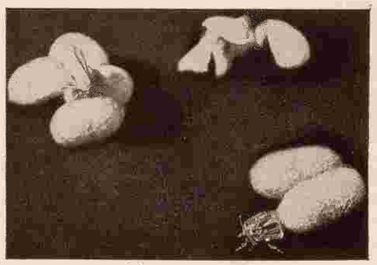
寫眞は一代交配蠶種製造の過程を示す。

繭種（日本種）



繭種（支那種）

採種



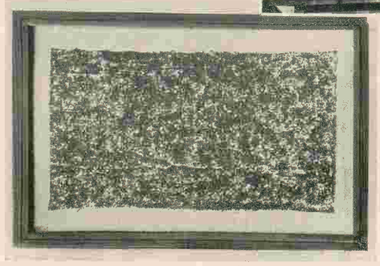
發蛾

產卵

母蛾調整

微粒子病檢査

蠶卵秤量



散種

蠶種の製造

我社は蠶種製造より生絲輸出迄一貫經營の理想を實現せんが爲夙に蠶品種の改良に意を注ぎ、自家用蠶種の製造所を設置して優良蠶種の製造に不斷の研究を續けて來た。特に御法川式繰絲機採用後優良格生絲の製造を開始してより益々「優良生絲は優良原料繭から」の必要性を痛感し、大いに自家用蠶種の製造設備を擴充整備した。現在に於ては蠶種製造所十餘ヶ所年製造高二千萬瓦を越ゆる大規模となり尚不足分は地方蠶種製造業者に委託製造を爲すの盛況となつた。蠶種檢査に付ては既に自治檢査の許可を受け各製造所共絕對無毒蠶種の製造を目指して嚴重な自家檢査を行つて居る。

掃立

蠶兒の飼料は桑葉のみである。桑葉の良否は蠶作及繭質に直ちに影響する。桑に關しては研究を要する問題が甚だ多い。

我社は全國に跨る特約養蠶組合の組織網を通じて三十萬特約養蠶家に桑園の改良指導を行つて居る。

優良桑園を持つ農家の蠶作は常に安泰である。稚蠶期に於ける適桑の飽食は豐作の祕訣である。

愼重な注意の下に蟻蠶は今や掃立てられた。

伸びよ！

育てよ！

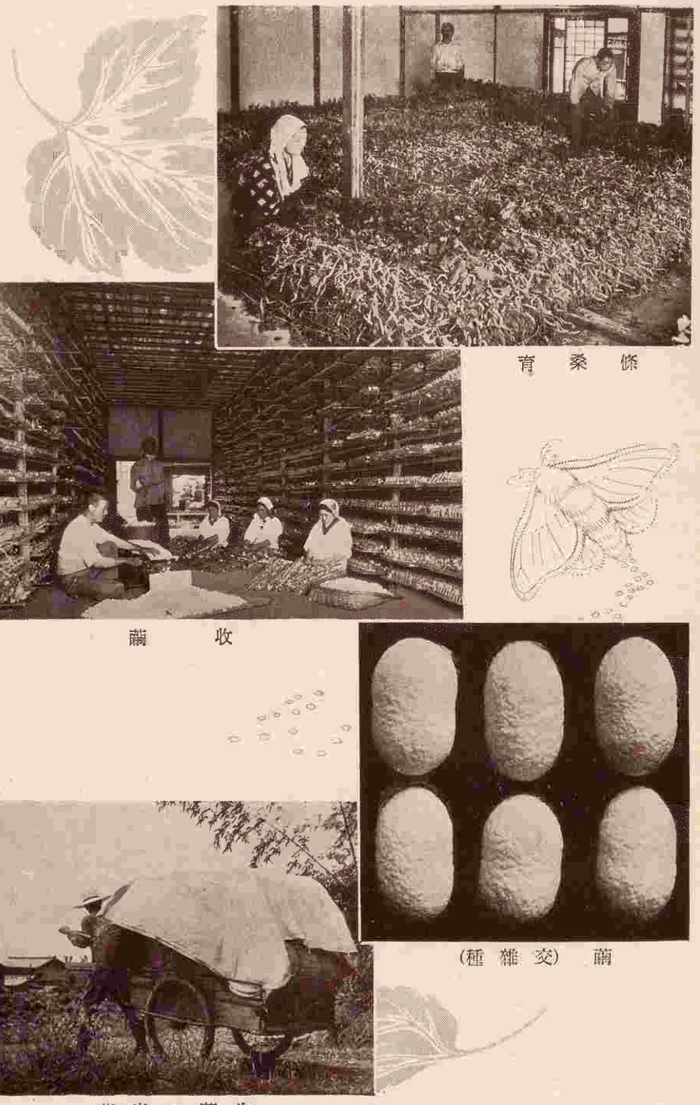
健やかに！

桑園

家農蠶養

掃立

兒蠶



條桑育

繭　收

繭（交雜種）

生繭の出荷

收繭

養蠶の方法も進歩した。條桑育、昭和育、何れも手數のかゝらぬ新時代に適應しい養蠶法である。

我社所屬養蠶指導員三千人の晝夜を分たぬ熱心なる指導と、吾兒を育てる樣な養蠶家の愛情と努力は遂に酬はれた。

一ケ月間寢ずの苦勞も昨日の話

やがて買つて戴ける約束の晴着、思へば樂しい事である。

村一番高値に賣り度いものだ。

收繭にいそしむ手は輕い。

心も躍る。

生絲製造及檢査

乾繭作業

生繭の出廻り期になると買入れた原料繭は短期間に一齊に工場へ殺到する。生繭は一刻も早く處理せねば品質を害し、やがて發蛾してしまふ。此の時の乾燥場は全く戰場宛然である。

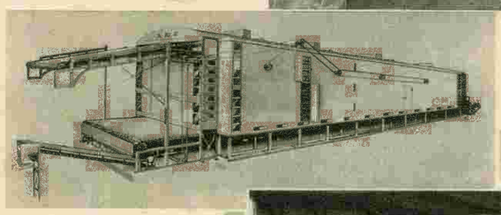
晝夜の別なく到着する生繭は熟練した扱者によつて直ちに看貫され手際よく荷捌きされて行く。仕譯された生繭は些の遲滯も無く乾燥機に給繭されて數時間の後には乾繭となつて出て來る。

新鋭大和式八段型自働輸送乾燥機の威力は自働給繭機、エレベーター、ベルトコムベヤー、自働充塡裝置等の附屬設備と相俟て殆ど人手を要せず一日數千貫を乾燥する。

乾燥された繭は次ぎから次ぎへと貯繭倉庫へ貯藏されて行く。

生繭工場へ入荷

入荷生繭の看貫



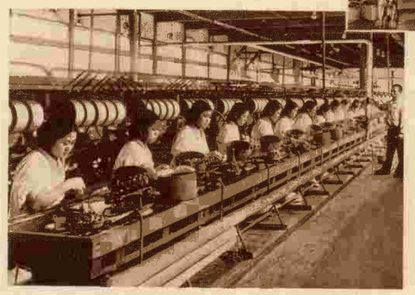
大和式自働輸送乾燥機

乾燥機への給繭作業

貯繭倉庫

撰繭作業

煮繭工場



普通繰絲

煮繭

製絲工場は白堊の大倉庫によつて特徴付けられる。此の大倉庫は一ヶ年間の所要原料を一時に買付けねばならぬ必要から生れたもので製絲業經營の特徴も亦茲に胚胎する。

原料繭は必要に應じて出庫され選繭工程を經て煮繭される。我社の採用する煮繭機は千葉式に統一され機構及操作の簡易と煮上り一定の特徴を以て愛用されて居る。

製絲作業の中最も高級技術を要するのは煮繭であり、煮上りの適否は繰絲能率、絲歩、品位に微妙な關係を持つ。それだけに煮繭技術は煮繭機よりも尊ばれ熟練と研究を必要とする。

煮繭された繭は繰絲場へ

片倉行進曲

一、朝だ夜明けだ希望の朝だ
　五體に漲る力を見よや
　繭が躍れば手も躍る
　躍る此の手で繰る絲は
　瀧と溢れて作る富
　ラララーラ片倉我が誇り

二、今だ尊い再來ぬ今だ
　作業は我等の心の姿
　一心こもれば採る絲の
　絲目ゆたかに斑も無い
　めぐる枠から國の富
　ラララーラ片倉國の盾

三、夜だしづかにいこひの夜だ
　おもへば樂しい職場の一日
　はげむ作業にわく血汐
　いつかひとつにかよひつゝ
　常に高鳴る人のみち
　ラララーラ片倉わがちから

繰絲と揚返し

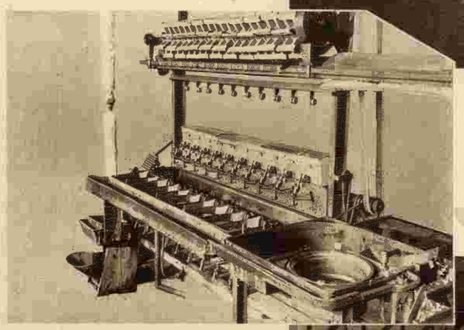
近代的設備を誇る工場内の擴聲器から片倉行進曲の輕快なリズムが流れる。

彼女達は朗かだ

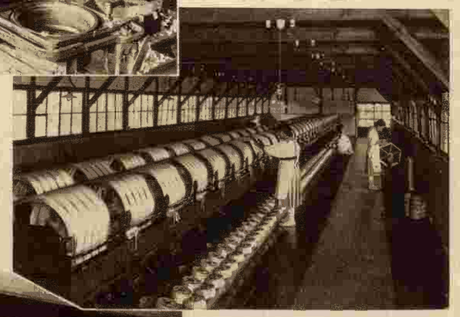
銃後の護りは職場から

產業報國の熱意に燃えて

御法川式多條繰絲機工場



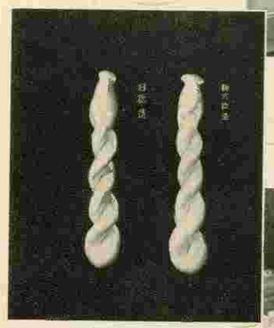
㊥式自働繰絲機



揚返工場

檢査綱

絲捻作業



右　現行捻造
左　改正前の捻造

束裝作業

生絲

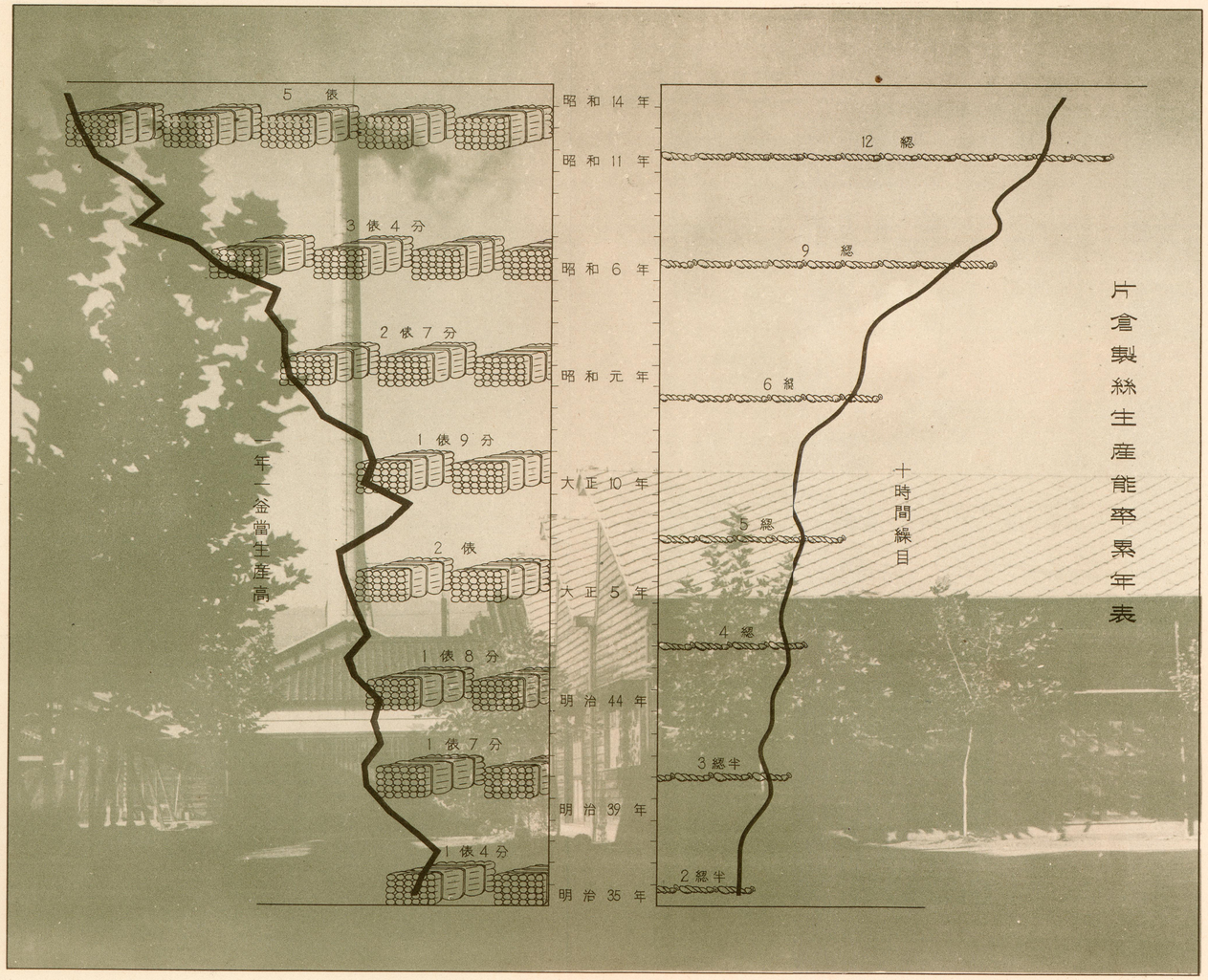
生絲整理

高級生絲は御法川式で低格品は普通繰絲機で……繰られた絲は大枠に揚返されて入念な檢査が行はれる。

出來上つた生絲は取扱ひに便する爲捻造りされ更に三十本宛束裝されて括となり商標が附けられる。

捻造りの方法は明治初年以來七十年優美と堅牢を旨とする舊法が行はれて居たが技術的に複雜な作業である爲昭和十二年より簡易な現行法に改められた。

新法に據れば舊法に比し技術の習得極めて容易で倍以上の能率を擧げ得る。

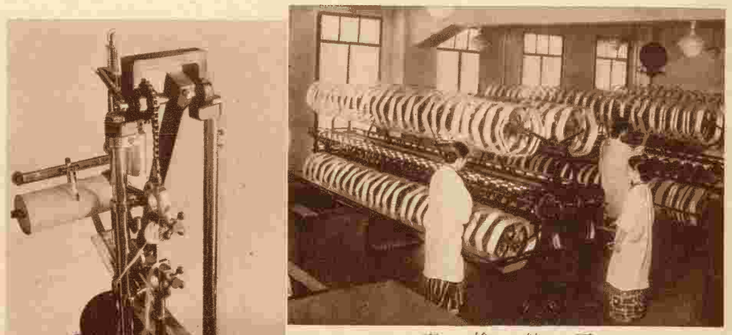

片倉製絲生産能率累年表
一年一釜當生産高
5 俵
3 俵 4 分
2 俵 7 分
1 俵 9 分
2 俵
1 俵 8 分
1 俵 7 分
1 俵 4 分
昭和14年
昭和11年
昭和6年
昭和元年
大正10年
大正5年
明治44年
明治39年
明治35年
12 總
9 總
6 總
5 總
4 總
3 總半
2 總半
十時間繰目

生絲檢査

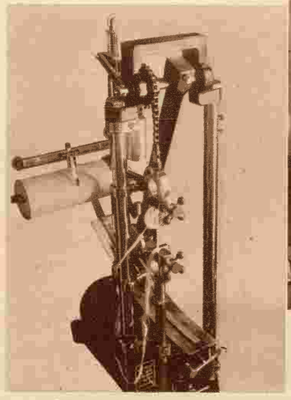
工場で出來た輸出生絲は全部横濱出張所へ送られ生絲檢査所の輸出檢査格付を受けて夫々仕向地へ輸出される。

- 輸出檢査
  - 正量檢査……無水量の一一一%を正量とす
  - 品位檢査
    - 肉眼檢査
      - 荷揃
      - 整理
    - 機械檢査
      - セリプレーン檢査
        - 絲條
        - 大小中額斑
      - 繰檢査
      - 纖度檢査
        - 最大纖度
        - 平均纖度
        - 偏差
      - セリグラフ檢査
        - 伸强
        - 抱合力
        - 檢査

格付＝檢査成績に應じて十等級に格付され檢査濟荷口は封印されて品位檢定證が交附される。



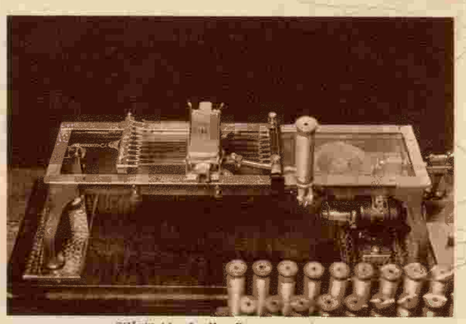
再絲檢査



セリグラフ(强伸力檢査器)

水分檢査

セリプレーン卷取



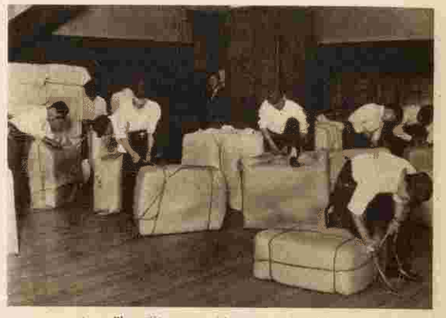
抱合檢査器式シラブュデ

生絲の輸出

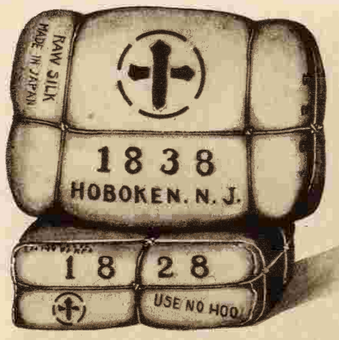
我社の生絲は大部分輸出に向けられる。横濱市場に於て販賣されるものは極めて少數で直輸出を主體とし仕向地はアメリカ合衆國向が大部分を占め、一部は英國、カナダ、フランス、南米、濠洲等へ送られる。

取引は海外機業家、靴下業者へ直接販賣するものと、生絲商へ販賣するもの及紐育出張所へ依託積みを行ふものと三通りに分けられる。

輸出生絲は絲格に應じて夫々輸出商標が添附され製造者の責任を明かにして居る。



輸出生絲の荷造り
（濟閥檢隊兵憲）



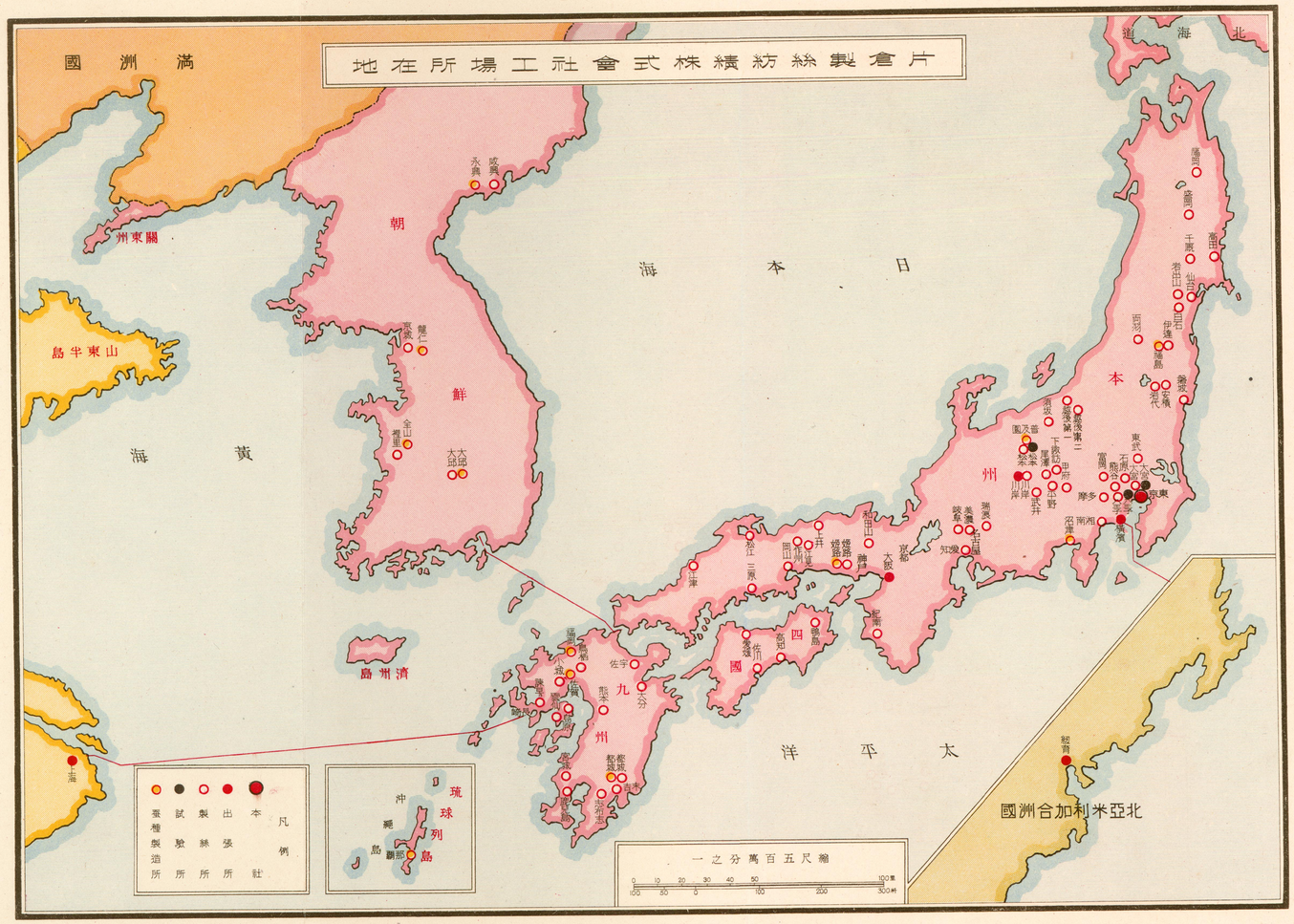
み積船の絲生出輸
（濟閥檢隊兵憲）

し出積るけ於に所張出濱横
（濟閥檢隊兵憲）

SUPERIOR
Marui Raw Silk
REGISTERED TRADE MARK
KATAKURA & Co LTD
Filature Raw Silk
KATAKURA & Co. Ltd
MINORIKAWA
SUPREME
COURT DANCER
Filature Raw Silk
K
KATAKURA & Co. Ltd
Filature Raw Silk
KK
KATAKURA & Co. Ltd
Filature Raw Silk
KK
KATAKURA & Co. Ltd
Filature Raw Silk
KK
KATAKURA & Co. Ltd
Filature Raw Silk
K
KK
KATAKURA & Co. Ltd
Filature Raw Silk
KS
KATAKURA & Co. Ltd
Filature Raw Silk
KK
KATAKURA & Co. Ltd
Filature Raw Silk
K
KATAKURA & Co. Ltd
JAPAN
MINORIKAWA
Filature Raw Silk
TORII
KATAKURA & Co. Ltd
MADE IN JAPAN
MINORIKAWA
Filature Raw Silk
Machine Chop
KATAKURA & Co. LTD.
MADE IN JAPAN
MINORIKAWA
Filature Raw Silk
MUSUME
KATAKURA & Co. LTD.
MADE IN JAPAN

我社生絲の輸出商標

我社の製絲工場


片倉製絲紡績株式會社工場所在地
滿洲國
關東州
朝鮮
黃海
山東半島
濟州島
日本海
太平洋
北海道
本州
四國
九州
琉球列島
沖繩島
北亞米利加合洲國
凡例
本社
出張所
製絲所
試驗所
蚕種製造所
縮尺五百萬分之一

信州地方

高岡城址

川岸製絲所

長野縣諏訪郡川岸村

明治二十七年片倉組本部㊀三全社として創設され、規模壯大にして三六〇釜の設備を有し當時民間に於ける最大の製絲工場であつた。翌二十八年片倉組本部を此處に置き爾來其の規模を擴張し明治四十一年川岸製絲所と改稱され大正六年には一千餘釜に及んだ。現在の設備は㊀本工場御法川式三五〇臺、㊁分工場は普通繰絲機二〇〇釜、㊂式自働繰絲機七二臺である。

當所は松本製絲所と共に我社に於ける最も古き工場で片倉組時代には前社長二代兼太郎翁常駐し全國の工場へ指揮命令を行つた歴史を持つて居る。

平野製絲所

岡谷市三二四五番地

明治十一年四月林倉太郎、林國藏の父子に依り四十人取を以て創設され明治四十二年七月片倉組に於て買收し平野製絲所と改稱した。現在の設備は御法川式四二〇臺である。明治時代は動力及用水共天龍川を利用し尾澤製絲所と同樣諏訪地方に於ける器械製絲草分けの工場である。

川岸製絲所

同上職員

後方ハ初代片倉兼太郎翁常駐銅像

平野製絲所

同上職員

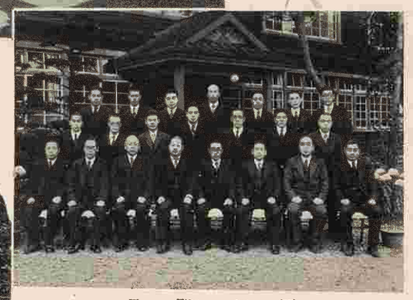
尾澤製絲所

岡谷市三五六四番地

明治十年六月尾澤金左衛門の創設に係り始めは僅か十六釜の器械製絲であつたが株式會社尾澤組發祥の製絲工場で大正十二年十一月我社へ合併の際に於ける設備釜數は一、〇五九釜であつた。爾來逐次設備を改善整備し現在は御法川式四〇〇臺を以て操業して居る。前橋及取手に出張所を有し原料繭の大部分は關東地方より取入れて居る。

平野製絲所と同樣信州器械製絲の草分けとして由緒ある製絲所である。

尾澤製絲所



員職上同

同上前橋出張所職員

同上取手出張所職員

松本製絲所

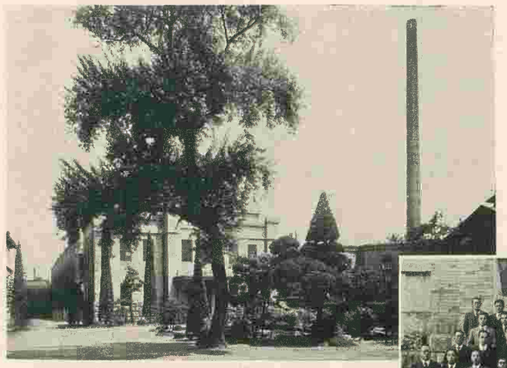
松本市大字筑摩

明治二十三年四八釜を以て創立され、松本片倉清水製絲場と稱したが明治三十七年六月松本製絲所と改稱した。最初片倉家の製絲場は明治十一年創立の垣外製絲場（大正六年廢止）のみであつたが松本工場の設置は實に片倉組事業擴張の先驅であつた。現在にては我社最古の工場となり本年を以て創立滿五十年を數へる。建物は鐵筋コンクリート二階建にして我國製絲工場としては他にその例を見ない。機械其の他總て最新式の設備を採用し分工場と併せて御法川式、㊫式合計七百八十四臺を以て操業して居る。故取締役今井眞平常駐し㊫式自働繰絲機を發明した。

下諏訪製絲所

長野縣諏訪郡下諏訪町

明治十七、八年頃の創業で明治三十二年時の經營者井上善次郎の七曜星社を買收し下諏訪製絲所と改稱した。當時の釜數は僅か二ヶ枠八〇釜であつたが、其の後次第に擴張し、大正中期長工式煮繭機二臺を設置して我社煮繭機使用の嚆矢を爲し、繰絲鍋、索緒器等をも考案した。現在の設備は御法川式三二二臺である。



松本製絲所

同上職員

同上源池分工場

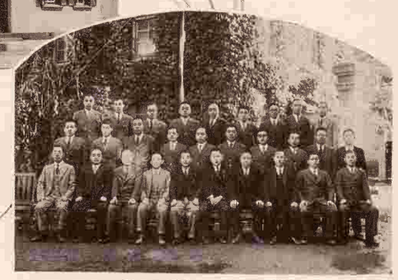
下諏訪製絲所

同上職員

田中製絲所

同上職員

武井製絲所



同上職員

田中製絲所

長野縣上高井郡須坂町

明治十三年二月田中新藏の創設に係り釜數十二釜であつたが次第に發展し大正九年我社へ合流の際は支店を合せて千五百餘釜となり合併後須坂田中製絲所と稱したが昭和十年田中製絲所に改められた。現在の設備は御法川式三二四臺である。

武井製絲所

長野縣上伊那郡伊那富村

當所は明治初年初代武井覺太郎創業の提絲製造に始まり漸次擴張して同三十四年二代武井覺太郎事業繼承の當時は百九十八釜となつた。

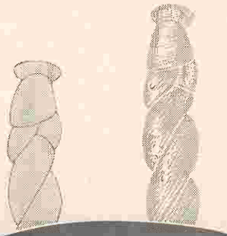
大正九年我社へ合同の際は九百九十八釜であつたが現在は御法川式五二二臺の設備となつた。大正より昭和の初めにかけて竹淵式自働索緒器及西尾式、織田式等の繰絲機を研究した工場である。

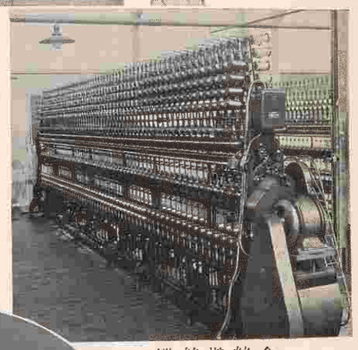
甲府撚絲工場

甲府市東青沼町

大正七年十一月山梨縣下の有志により資本金六十萬圓を以て富士撚絲工業株式會社として創立されたが昭和五年十二月に至り經營改善の爲貳拾四萬圓に減資した。然るに經營狀態は依然として不振であつたので關係者は我社へ買收方を懇請して來たので昭和十二年九月二十八日事業の一切を繼承し甲府撚絲工場と改稱した。買收後着々と設備を改善し現在伊太利式撚絲機一四、八三二錘及附屬機械一式となつて居る。

甲府撚絲工場





合絲撚絲機

撚絲

同上職員

關東地方

關東地方

八王子製絲所

東京府南多摩郡小宮町

明治十年六月荻原彦七により四十八人繰りを以て創業されたが其の後明治三十四年經營不振の爲片倉組に讓渡した。買收後八王子製絲場と稱し八王子機業地の中心に所在する爲地遺絲の販賣をも兼營したが昭和七年分離して八王子販賣部とした。大正十一年火災の爲全工場烏有に歸したが直ちに復興し現在の設備は御法川式五五二臺を以て操業して居る。當所の製品は夙に八王子格なる一格を創出し矢島格を凌駕する優良生絲製造工場として名聲を博した。

八王子製絲所湘南分工場

藤澤市辻堂

昭和六年蠶絲興業株式會社（資本金五十萬圓）の創立に係り東洋式二〇〇臺を設備して居たが同九年三井物産株式會社の委任經營となつた。其の後昭和十二年三月七日我社に於て事業の一切を繼承し湘南製絲所と改稱し御法川式E型百六十臺に改造した。翌十三年四月八王子製絲所の分工場となつた。

（寫眞昭和十三年四月一日撮影）

同右職員

八王子製絲所

同左職員

八王子製絲所湘南分工場

大宮製絲所

大宮市大字大宮

當所の前身は片倉組縣外進出の先驅たる千駄ヶ谷製絲所である。同所は明治三十一年東京市外千駄ヶ谷に小口傳吉と共同にて三二釜を以て設立されたが同三十四年片倉組購買所たる埼玉縣大宮町仲町に移轉された。其の後大正五年六月現在の地に三六〇釜の規模を以て再度新築移轉された。本邦製絲界に多條繰絲機時代を現出せしめた御法川式は實に當所に於いて苦心研究の結果工業化されたものである事を特に銘記すべきである。當工場の設備の完備せる事、及七萬八千坪の廣大なる敷地は庭園樹木の美觀、宛然一大公園を爲し毎回外國觀光視察團其の他の參觀に供し我社の代表工場として海外にまで名聲を博して居る。

現在設備は御法川式四〇〇臺である。

石原製絲所

熊谷市大字石原

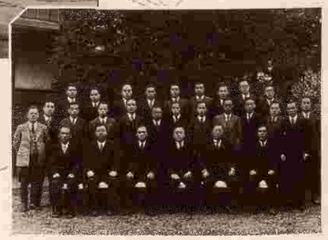
當所は熊谷町有力者の合資に依り設立された三木原製絲所を明治四十年片倉組にて買收し五〇釜を增設して一五〇釜と爲し同年六月一日開業した。

昭和六年四月より熊谷製絲所を分工場として合併したるも九年三月分離し現在設備は御法川式四〇〇臺である。

大宮製絲所

同上職員

石原製絲所



同上職員

熊谷製絲所

熊谷市大字熊谷

明治三十四年尾澤組に依り六〇釜を以て創立された。其の後次第に擴張し大正九年尾澤組の合併により我社に引繼ぎの際は一、〇〇五釜となつた。昭和六年より石原製絲所の分工場となつたが同九年より獨立し現在は御法川式四〇〇臺に改善整備された。

東武製絲所

埼玉縣北埼玉郡三俣村

明治三十三年六月地方有志により資本金五拾萬圓釜數三五〇を以て創立され埼玉製絲株式會社と稱した。夙に武州格生絲を以て名聲を博したが歐洲戰後の不況により大正十五年我社と共同にて資本金百萬圓の武州製絲株式會社に改組し其の後は當社委任經營の下に業績頗る擧つたが昭和八年八月一切を擧げて我社へ合併した。現在の設備は御法川式三〇〇臺となつて居る。

熊谷製絲所

同上職員

東武製絲所

同上職員

富岡製絲所

群馬縣北甘樂郡富岡町

當所は明治五年の設立にしてフランス式器械製絲の官營模範工場であつた。我國器械製絲の草分けとして最古の歴史を有し佛人ブリユーナーの指導設計に成る建築物は今尚巍然として其の規模壯大なることは驚く許りである。明治六年には畏くも蠶絲業奬勵の御思召を以て皇后、皇太后兩陛下の行啓を仰ぎ

いと車とくもめぐりて大御代の
富をたすくる道ひらきつゝ

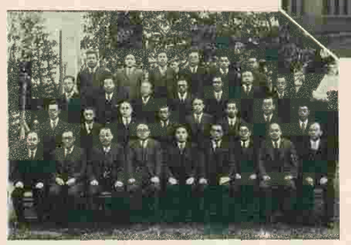
の御歌を賜つた事は遍く人の知るところである。

その後明治二十六年三井家に拂下げられ、同三十五年には原合名會社へ讓渡された。爾來永らく原富岡製絲所として經營されたが昭和十三年七月、片倉製絲と共同にて資本金百萬圓の株式會社に改組して委任經營となり更に翌十四年我社に合併した。現在の設備は一〇式四一六臺御法川式一八〇臺である。

上は明治六年創立當時の富岡製絲所

同上繰絲場

現在の富岡製絲所



同上職員

多摩工場

東京府西多摩郡福生町大字熊川

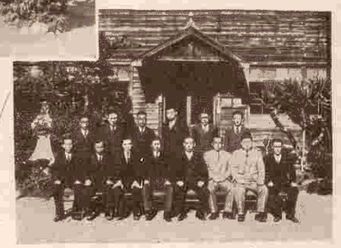
當工場は明治七年森田浪吉個人經營にて座繰五〇釜を以て創設され武州地方民間製絲の先驅として爾來引續き經營されて居たが昭和二年資本金二十萬圓の森田製絲株式會社に改組された。同四年には八王子市第三六銀行に引繼がれ多摩製絲株式會社と改稱して資本金五十萬圓に增資し片倉製絲の委任經營となつた。其後昭和八年一部火災にかゝりし事あるも順調に發展し昭和十五年十月一日我社へ合併された。現在の設備は御法川式二三〇臺である。

平工場

平市字三倉

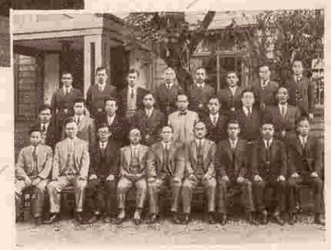
昭和四年一月地方蠶絲業振興の爲地方有志と片倉製絲共同にて資本金貳百萬圓の片倉磐城製絲株式會社として創立され極めて順調な經過を辿つたが昭和十五年十月一日我社へ合併し平工場となつた。現在御法川式二五六臺の規模となつて居る。

多摩工場



同上職員

平工場



同上職員

東北地方

東北地方

岩代製絲所

郡山市境橋町

明治四十五年三月片倉組に依り釜數二四〇の規模を以て設立され其の後次第に設備の擴張を行つて大正八年には七九〇釜の大規模となつたが現在は御法川式五〇〇臺に改善整備されて居る。

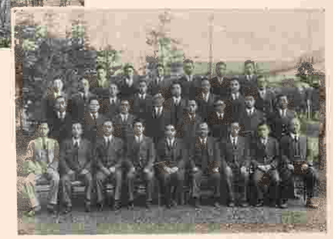
安積工場

郡山市字田中

大正五年小口組に依つて創設され六〇〇釜の規模であつたが昭和六年八月日東製絲株式會社に引繼がれた。

昭和十一年十二月より我社に於て之を賃借經營したが昭和十三年日東製絲の合併に依り直屬工場となつた。現在設備は日東式十六條繰絲機三八四臺である。

岩代製絲所



同上職員

安積工場

同上職員

伊達工場

福島縣伊達郡湯野町

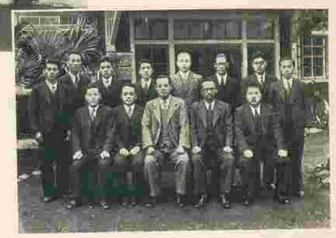
大正七年七月縣下信夫、伊達兩郡の有志により二二六釜の伊達製絲株式會社として創立されたが昭和二年七月和田商事合資會社、昭和六年一月和田合名會社、次いで和田製絲株式會社と三度名儀變更を行つた。昭和七年四月には日東製絲株式會社に引繼がれ昭和十一年十二月より我社の賃借經營と爲つたが昭和十三年日東製絲の合併に依り我社の經營となつた。現在御法川式二〇〇臺である。

兩羽製絲所

山形縣東置賜郡高畠町

明治三十二年地方有志により兩羽製絲株式會社として創立されたが四十二年一旦解散し横濱茂木商店へ讓渡されたるを片倉組にて買收し四月十二日二一四釜を以て開業した。現在設備御法川式三九四臺である。同工場は創業以來「羽前エキストラ」格の優良生絲を生産し遠く海外にまで名聲を博した。

伊達工場



同上職員

兩羽製絲所

同上職員

盛岡工場

岩手縣岩手郡本宮村大字仙北町

明治四十年七月尾澤組により一〇八釜を以て盛岡市下厨川に創設された。大正九年尾澤組の合併により我社に引繼がれ三四〇釜となつた。其の後昭和四年十月五日岩手縣蠶絲業振興の爲岩手縣是製絲株式會社（資本金三百萬圓）の設立さるゝに當り同社へ讓渡し我社の委任經營するところとなつた。昭和十五年十月一日に至り岩手縣是製絲は我社へ合併されたので再び所屬工場となつた。現所在地は昭和十三年岩手縣繭絲販賣購買組合聯合會盛岡工場を買收移轉したものでSO式三〇四臺の設備をもつて居る。

高田工場

岩手縣氣仙郡高田町字大石

昭和五年八月岩手縣是製絲株式會社工場として設立されたが昭和十五年同社の合併により我社高田工場となつた。現在の設備は御法川式二四〇臺である。

盛岡工場

同上職員

高田工場

同上職員

千厩工場

岩手縣東磐井郡千厩町字脇谷

昭和六年岩手縣是製絲株式會社千厩工場として設立され我社の委任經營下にあつたが昭和十五年十月縣是製絲の合併により我社へ引繼がれた。現在御法川式二四〇臺である。

福岡工場

岩手縣二戸郡福岡町

昭和八年岩手縣是製絲株式會社福岡工場として創設され我が社の委任經營となつて居たが縣是製絲の合併により引繼がれた。現在御法川式二〇〇臺の設備となつてゐる。

千厩工場

同上職員

福岡工場

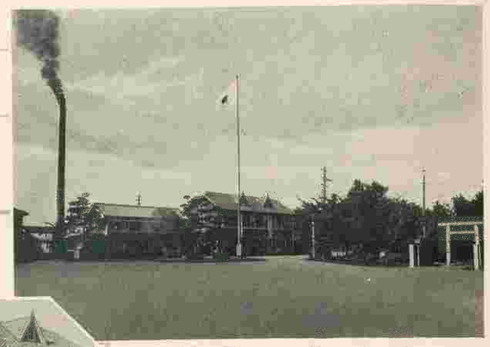
同上職員

越後第一工場

昭和二年七月地方有志及片倉製絲共同にて資本金百萬圓の片倉越後製絲株式會社を創立し我が社の委任經營となつて居たが昭和十三年八月合併して越後第一工場と改稱した。現在設備御法川式三一〇臺である。

越後第二工場

昭和五年二月資本金二十五萬圓の片倉共榮製絲株式會社工場として織田式一三六臺を以て創業した。創立以來我社の委任經營下にあつたが昭和十二年九月買收し所屬工場となつた。現在設備御法川式一二六臺である。



越後第一工場

同上職員

越後第二工場

同上職員

宮城縣是共榮蠶絲株式會社

仙臺工場　宮城縣仙臺市東八番町
仙北工場　同　玉造郡岩出山町
仙南工場　同　刈田郡白石町

仙臺工場は明治三十八年六月片倉組仙臺製絲所として創設され信州製絲家中奥州進出の先驅をなした。其後昭和十二年に至り縣下蠶絲業更生發展の爲宮城縣是共榮蠶絲株式會社の設立と共に設備の一切を讓渡し現在は我社の委任經營となつて居る。設備は御法川式四三二臺である。

仙南工場は昭和十二年十二月、仙北工場は昭和十三年二月共に宮城縣共同製糸施組合により設立され宮城縣是共榮蠶絲株式會社の管理工場として會社の賃挽を行つて居たが昭和十五年に至り買收され縣是會社の所屬工場となつた。兩工場共各々御法川式二四〇臺を設備して居る。

仙臺工場

同上職員

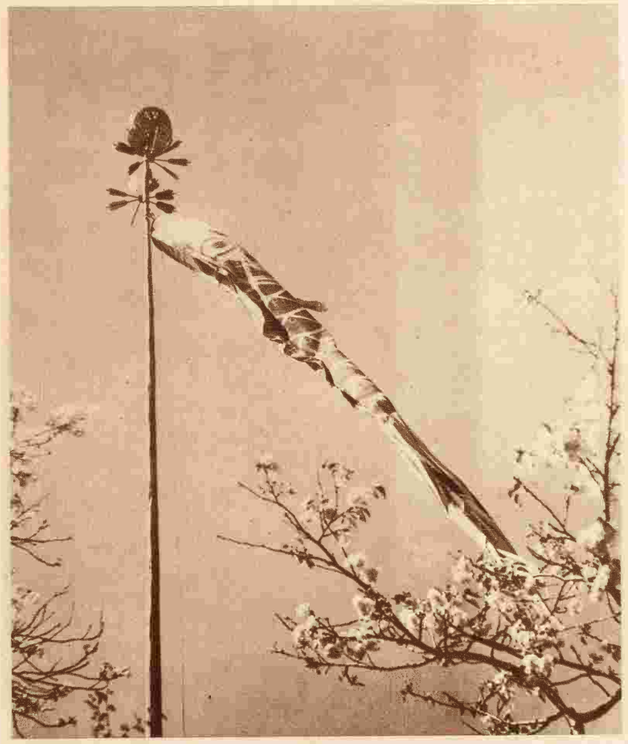
仙北工場

同上職員

仙南工場

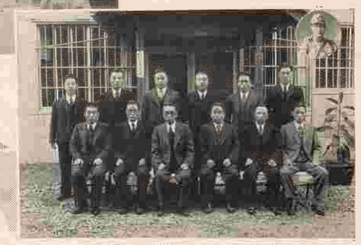
同上職員

中部近畿地方



中將近藤氏

瑞浪製絲所



同上職員

愛知製絲所

同上職員

瑞浪製絲所

岐阜縣土岐郡瑞浪町

明治四十一年五月合資會社伊東組の工場として三二〇釜を以て設立されたが歐洲大戰後の經營不振に依り我社に於て之を買收し大正十五年四月十五日瑞浪製絲所と改稱した。現在普通繰絲機二二六釜を有す。

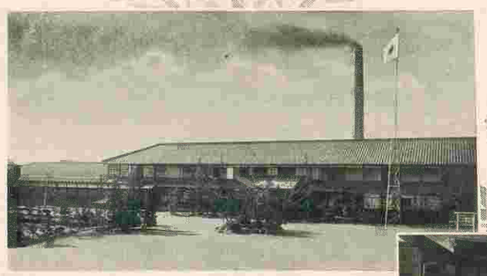
愛知製絲所

一ノ宮市松降通

明治四十一年片倉組に依り三三二釜を以て創業された。其の後大正十四年には四八八釜に擴張したが昭和六年御法川式四三二臺に改造し現在に及んで居る。

岐阜製絲所

同上職員



美濃工場

同上職員

岐阜製絲所

岐阜市青柳町

大正六年三月長野縣須坂町田中新之助の個人經營により二六〇釜を以て創立された。大正九年片倉製絲紡績株式會社設立の際事業一切を合流して岐阜田中製絲所と改稱し昭和十年岐阜製絲所と改めた。現在御法川式五〇〇臺を以て操業して居る。

美濃工場

岐阜市辨天町

大正九年三月金山製絲株式會社岐阜支店として創設されたが昭和六年十二月小口組に買收された。翌七年小口組より日東製絲株式會社に引繼がれ經營されて居たが昭和十一年我が社の賃借經營するところとなり續いて十三年合併された。現在は日東式十八條繰絲機二八〇臺の設備である。

紀南製絲所

和歌山縣日高郡湯川村

昭和三年地方有志の懇請に應じ和歌山縣下產繭處理機關として姫路工場の一部を移轉し同年六月二十五日開業された。昭和六年に至り御法川式二八四臺に改造されたが昭和九年九月の大暴風雨に依り繰絲工場二棟倒潰し再建の際二〇〇臺に整備された。附近は紀州蜜柑の名產地として知られて居る。

和田山工場

兵庫縣養父郡大藏村

大正五年小口組に依り二四〇釜を以て創立された。爾來設備を擴張し大正十一年には九一〇釜となつたが昭和六年三月日東製絲株式會社に引繼がれ昭和十一年十二月より我社の賃借經營するところとなり續いて同十三年合併された。現在日東式十六條繰絲機一七六臺、御法川式二〇〇臺の設備となつて居る。

紀南製絲所

同上職員

和田山工場

同上職員

中國四國地方

中國四國地方

上井製絲所

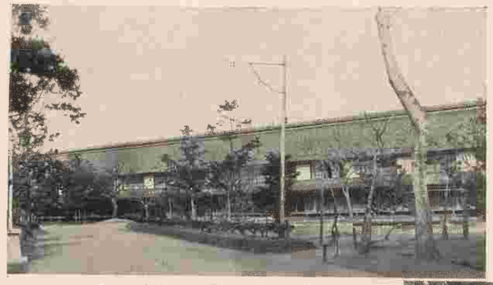
鳥取縣東伯郡日下村

大正五年十月片倉組の創設に係り翌年三月四八〇釜を以て繰業を開始した。當地方は夙にエキストラ格の生産地として知られ優良原料の生産も多かつたので釜數を增加し大正十五年には六二〇釜迄擴張したが現在は御法川式四〇〇臺に改善整備された。

姫路製絲所

姫路市

大正六年二月片倉組により六六〇釜を以て創設され漸次擴張して大正十二年には九三四釜に達した。其の後原料調節と經營合理化の爲一部を和歌山縣に移轉し紀南工場とした。更に昭和十四年五月御法川式六〇臺を江見工場へ移管し現在は御法川式三七二臺を以て繰業して居る。



上井製絲所

同上職員

姫路製絲所

同上職員

松江工場

松江市東朝日町

昭和三年三月島根縣下の有力者相諮り縣内蠶絲業發展と、地方產業開發の爲我社製絲工場設置方を懇請して來たので、資本金貳百萬圓を以て松江片倉製絲株式會社を創立した。爾來我社委任經營の下に着々と地方蠶絲業開發に功績を擧げて來たが昭和十五年十月我社へ合併された。現在御法川式三〇〇臺の設備となつてゐる。

江津工場

島根縣那賀郡江津町

大正十四年七月地方有志より蠶絲業振興策として製絲工場設置を我社へ懇請して來たので地方產業開發の爲翌十五年三月資本金百萬圓を以て片倉江津製絲株式會社を創立した。爾來我社委任經營の下に拮据經營に努めたが昭和十二年三月資本金六拾五萬圓に減資した。昭和十五年十月事業合同の爲我社へ合併されるに至つた。現在の設備は御法川式二八〇臺である。

松江工場

同上職員

江津工場

同上職員

岡山工場

岡山市上伊福

大正十五年六月岡山市の有力者相諮り我社と提携して資本金貳百五十萬圓の備作製絲株式會社を創立した。同社岡山工場は同年十一月一日二八二釜を以て我社委任經營の下に事業を開始したるも其後昭和十三年九月一日合併されるに至つた。現在御法川式二四八臺の設備をもつて居る。

岡山工場

同上職員

作州工場

岡山縣眞庭郡落合町

當工場は備作製絲株式會社創立の際大月製絲株式會社を買收し大正十五年六月二十八日我社委任經營の下に一五五釜を以て創業した。其の後設備の大改善を行ひ昭和九年には御法川式一八〇臺の新式工場となつたが、昭和十三年備作製絲の合併により我社所屬となつた。

作州工場

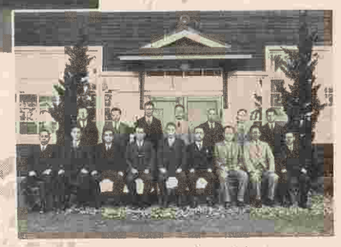
同上職員

江見工場

岡山縣英田郡江見町

昭和七年三月株式會社小口製絲所江見工場として增澤式六緒二一〇釜を以て創設された。然るに同年四月には日東製絲株式會に名儀變更となり昭和十一年十二月には我社の賃借經營に移り續いて十三年合併された。現在の設備は御法川式一八〇釜である。

江見工場

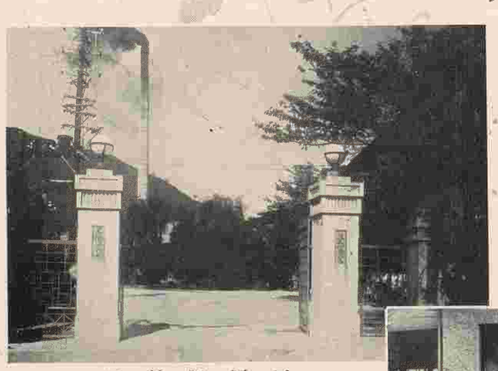


同上職員

三原製絲所

三原市東町

昭和四年廣島地方有力者により縣下產繭處理機關として製絲工場設置を熱心に我社へ懇請して來た。玆に於て翌年五月工場建設に着手し五年七月御法川式二十條一四四臺、三十條九六臺、普通繰絲機一〇釜、計二五〇臺を以て開業した。昭和十二年普通繰絲機を廢棄し現在御法川式二四〇臺の設備となつて居る。



三原製絲所

同上職員

高知製絲所

高知市旭町

明治四十三年十二月土地の有志により資本金五萬圓設備一二四釜の旭製絲株式會社として創立されたが大正二年五月片倉組之を買收し設備の改善擴充を計つた。然るに大正六年七月地元有志は再び資本金三百萬圓の株式會社高知製絲所を創立し製絲業自營を計つたので之に讓渡せるところ歐洲大戰後の不況により大正十一年一月鴨島分工場と共に再度我社の買收するところとなつた。現在の設備は御法川式三六〇臺である。

高知佐川工場

高知縣高岡郡佐川町

大正九年一月越智、佐川兩町有志に依り資本金五拾萬圓を以て佐越生絲株式會社として創立され其の後二回に亘り拂込を徴したるも思はしからず大正十五年資本金を拾萬圓に減資し片倉製絲へ經營を委任した。其の後昭和七年十二月片倉佐越製絲株式會社と改稱し、翌八年三月更に七萬五千圓に減資したが同年五月再び拾萬圓に增資し昭和十四年十月我社へ合併され高知製絲所佐川分工場となつた。現在普通繰絲機一〇〇釜の設備である。

高知製絲所

同上職員

高知佐川工場

同上職員

鴨島製絲所

同上職員

愛媛工場

同上職員

鴨島製絲所

徳島縣麻植郡鴨島町

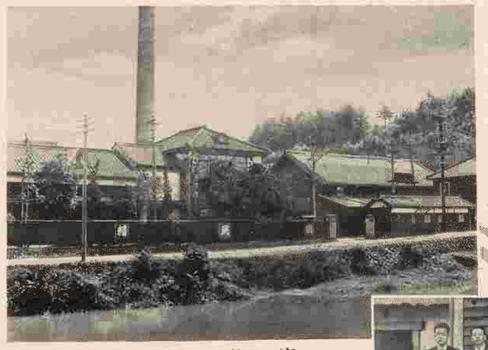
當所は元佐渡文右衛門の個人經營であつたが大正七年五月株式會社高知製絲所に買收され、更に大正十一年我社に引繼がれ鴨島製絲所となつた。現在御法川式二五二臺の設備である。

愛媛工場

愛媛縣越智郡富田村

昭和七年九月三菱商事株式會社の資本關係にて資本金貳拾萬圓の愛媛製絲株式會社として創立され、昭和九年五月日東製絲株式會社に合併された。其の後昭和十一年十二月我社の賃借經營に移り續いて十三年合併されるに至つた。繰絲機は日東式十六條二四〇臺である。

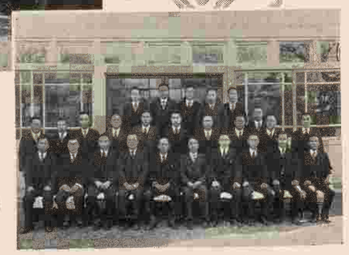
九州地方



宇佐製絲所

同上職員

大分製絲所



同上職員

宇佐製絲所

大分縣宇佐郡北馬城村

明治二十九年七月佐藤又四郎個人經營の下に馬城製絲所として六〇釜の設備を以て創立されたが大正二年一月片倉組之を買收し宇佐製絲所と改稱した。當所は片倉組九州への製絲進出の先驅を爲したる點に於て意義深く、次第に設備の改善擴充を計り現在は御法川式二〇〇臺となつて居る。

大分製絲所

大分市大字大分

大正六年四月片倉組により七五〇釜の設備を以て設立された。大正九年には二〇五釜を增設して九五五釜となつたが昭和八年以後漸次設備の改善を行ひ現在は御法川式五〇〇臺となつた。當所の敷地は三萬五千坪裏手の丘陵傾斜地に寄宿舍、病院、講堂等附屬建物を建設し、窓外に遠く別府灣を望み眺望絶佳なること他にその類を見ない。

鳥栖製絲所

佐賀縣三養基郡鳥栖町

當所の沿革は明治四十一年片倉組が九州地方へ購繭地盤獲得に進出した時に始まり四十四年には鳥栖乾燥場を新築し北九州地方の購繭所とした。次いで大正三年六月には三二釜の試驗工場を附設したが翌四年春挽より二七二釜に擴大し更に逐次增設して昭和四年には一、〇六八釜の大工場となつた。現在は御法川式五六〇臺、普通繰絲機二四〇釜の設備を有し九州地方に於ける指導的工場となつて居る。

鳥栖製絲所

同上職員

小城郡是製絲所

佐賀縣小城郡小城町

當工場は元多久製絲生產販賣組合の經營であつたが大正六年二月小城郡是製絲株式會社に組織變更を爲し一〇八釜を以て操業した。大正九年五月我社に於て之を買收し大正十一年現在の所在地に新築移轉した其の後次第に設備の改善を行ひ現在御法川式三〇〇臺となつて居る。

小城郡是製絲所

同上職員

熊本製絲所

熊本市田崎町

大正六年五月株式會社尾澤組により四二〇釜を以て設立されたが大正十二年尾澤組の合併により我社に引繼がれた。其の後再三設備の改善を行ひ現在は御法川式三九二臺、普通繰絲機一八釜となつて居る。

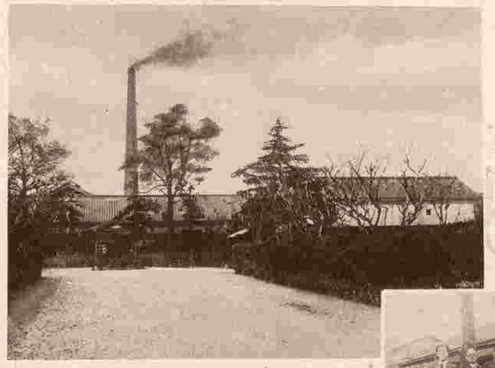
都城製絲所

都城市川東

大正九年小口組により三六〇釜を以て創立せられ漸次設備を擴大して十五年には七二〇釜に達し小口組工場中の白眉となつた。昭和七年日東製絲株式會社に引繼がれ同十一年我社の賃借經營となり次いで同十三年合併された。同年十一月設備の大改修を行ひ御法川式二〇〇臺、普通繰絲機二〇〇釜、計四〇〇臺に整備された。

熊本製絲所

同上職員



都城工場

同上職員

諫早工場

諫早市永昌町

大正九年三月三十日地元關係者と我社協力し長崎縣蠶絲業振興を目指して縣是組織の下に資本金壹百八拾五萬圓の長崎製絲株式會社を創立した。當工場は同社の諫早工場として設立され我社委任經營の下に大正十一年五月二十八日二四〇釜の設備を以て開業された。同社は創立直後資本金拾五萬圓の諫早製絲株式會社を合併し貳百萬圓に増資した。更に昭和十二年六月には島原町雲仙製絲株式會社を買收し、諫早、島原、雲仙の三ヶ工場を經營して堅實に推移したが昭和十五年十月我社へ合併された。現在御法川式三四〇臺の設備となつて居る。

島原工場

長崎縣南高來郡島原町

大正元年内田彌吉の個人經營により三三釜を以て創設され其の後深田製絲場と稱し一六〇釜に増設された。大正九年五月長崎製絲株式會社に買收され我社委任經營となつて居たが昭和十五年十月合併された。現在御法川式一六〇臺の設備である。

諫早工場

同上職員

島原工場

同上職員

雲仙工場

長崎縣南來郡島原町

昭和二年十二月十九日資本金參拾萬圓の雲仙製絲株式會社として創立され翌三年二月一日八二釜を以て開業したが其の後業績思はしからず昭和十二年六月長崎製絲株式會社へ買收され我社の委任經營する處となつた。昭和十五年十月に至り長崎製絲は我社へ合併されたので片倉製絲雲仙工場となつた。現在普通繰絲機二二〇釜の設備となつて居る。

鹿兒島工場

鹿兒島市原良町

大正八年十一月鹿兒島縣授產社製絲部を解體して縣是製絲たる資本金五百萬圓薩摩製絲株式會社が創立されたが翌九年業界未曾有の恐慌により誕生間も無き同社は甚大なる打擊を蒙つた。玆に於て同社は大正十二年二月より我社委任經營の下に姉妹會社として再出發した。爾來順調なる業績を擧げて來たが昭和十五年十月合併されるに至つた。鹿兒島工場は大正九年三月の創業以來合併迄薩摩製絲の本社となつて居つた所で現在御法川式四五〇臺を設備して居る。

雲仙工場

同上職員

鹿兒島工場

同上職員

宮之城工場

鹿兒島縣薩摩郡宮之城町

當工場は明治十八年舊薩摩藩宮之城領主の家老平田孫一郎が同志と共に舊盈進館跡の一隅に座繰製絲五〇釜を創設したに始まる。同二十二年之を屋下帝釋天山麓に移轉して五〇釜の器械製絲と爲し、次で二十九年鹿兒島縣授産社に併合、宮之城第二支所と改稱して現在の所在地に移轉した。大正八年薩摩製絲に合流し大正十二年より我社の委任經營となり昭和十五年に至り合併された。

現在設備御法川式二四〇臺である。

志布志工場

鹿兒島縣囎唹郡志布志町

大正八年十一月薩摩製絲株式會社分工場として肝屬郡鹿屋町に創設され其の後我社委任經營となつて居たが昭和七年現在の地に新築移轉し志布志工場と改めた。昭和十五年に至り薩摩製絲の合併により當社所屬となつた。現在設備御法川式一六〇釜である。

宮之城工場

同上職員

志布志工場

同上職員

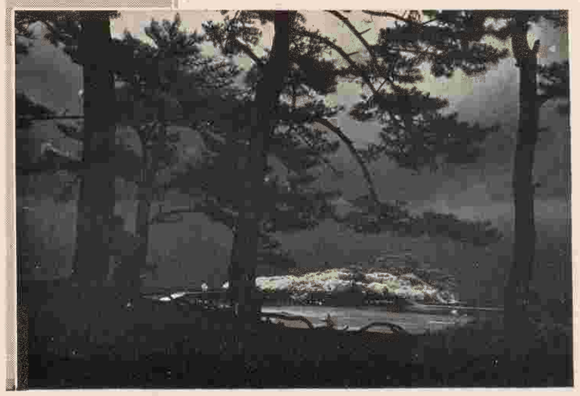
末吉工場

鹿兒島縣囎唹郡末吉町

大正八年十月薩摩製絲株式會社分工場として建設に着手し翌九年二月創業し大正十二年以後は我社の委任經營下にあつたが昭和十五年薩摩製絲の合併により我社所屬となつた。現在普通繰絲機一三八釜の設備となつて居る。

末吉工場

同上職員



朝

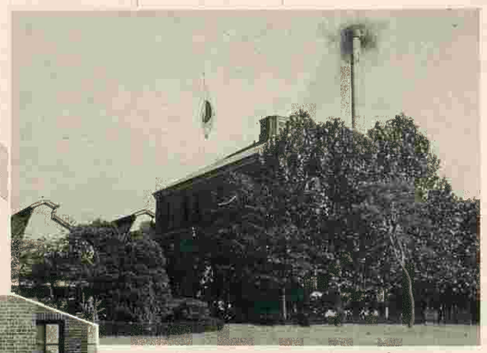
鮮

障

礙

大邱製絲所

同上職員



京城製絲所

同上職員

大邱製絲所

朝鮮大邱府大鳳町

當所は大正八年四月の創立にして我社朝鮮に於ける製絲工場設置の先驅である。創業當初は繰絲釜數三六〇、中原式煮繭機を用ひた。其の後漸次規模を擴大したが昭和十年御法川式を設置し現在は同機三四〇臺、普通繰絲機一二〇釜を以て操業して居る。

京城製絲所

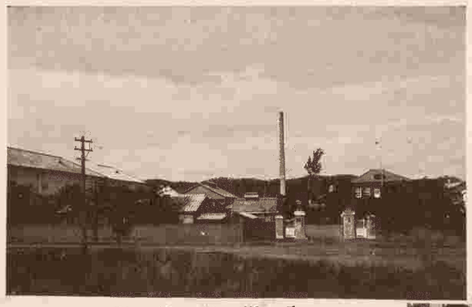
朝鮮京城府杏村町

當所は明治四十五年六月伯爵宋秉畯の創立に係り朝鮮器械製絲の濫觴をなし大正四年七月京畿道營に移管され恩賜授産京城製絲場と改稱された。其の後當局の勸奬により昭和二年四月我社に於て之を買收し同年七月普通繰絲機一一二釜を以て開業した。其の後逐次設備の改善を行ひ現在御法川式二四〇臺を以て操業して居る。

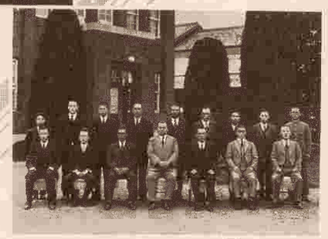
全州製絲所

朝鮮全州府相生町

昭和二年七月全羅北道の產繭二拾餘萬貫を消化する爲道當局及道有志の熱心なる製絲工場設置懇請に應じて敷地の提供を受け翌三年一月工場を新設したものである。工場の建物は勿論寄宿舍其の他總て模範的設計に成り當時は業界の偉觀と稱された。現在五緒繰、普通繰絲機二四〇釜の設備である。



全州製絲所



同上職員

咸興製絲所

朝鮮咸興府曙町

大正十三年總督府に於て蠶業振興計畫實施以來咸鏡南道に於ける產繭額は著しく增加し製絲工場設置の要望頓に高まり當局の勸說により昭和三年我社は咸興製絲所を設置した。繰絲機は當時最新式の設備たる御法川式A型二九六臺を据付け同年十月八日開業した。

咸興製絲所

同上職員

蠶種製造所

一代交配蠶種普及團

松本市大字筑摩

大正三年今井五介は同志と謀り一代交配蠶種一二〇〇枚を製造して地方養蠶家に無償配布を爲し、產繭の引取を保證して試驗飼育せしめたるに非常な好結果を得たので同年十月には大日本一代交配蠶種普及團を組織した。此の試驗は實に本邦蠶絲業界に革命を齎した一代交配種實用化の第一歩であつた。片倉組は合資會社交進社の名を以て普及團に加盟し本格的に一代交配蠶種の製造を始めた。普及團及交進社は翌五年解散され片倉組にて事業一切を繼承して合資會社大日本一代交配蠶種普及團の名稱を引繼ぎ大正十年我社に合併した。昭和五年に至り事業の發展と共に試驗部を獨立して蠶業試驗所とした。現在年製造高四百萬瓦に及ぶ大設備となつた。

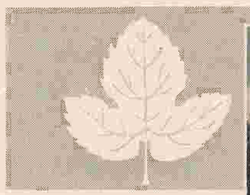
一代交配蠶種普及團

同左職員

沼津蠶種製造所

靜岡縣駿東郡大岡村

伊豆地方は明治時代より片倉組の購繭地盤であつたが大正七年頃より普及團の原蠶種飼育分場を設け次いで昭和三年に至り出張所を設置したが次第に事業の發展するに伴ひ昭和九年一月より獨立して沼津蠶種製造所となつた。年製造高三百萬瓦に達す。



沼津蠶種製造所

同上職員

福島蠶種製造所

福島市大字塚間

一代交配蠶種の成功により普及團の事業は益々發展し社製優良蠶品種の製造は極めて繁忙となつた。折柄我社は御法川式繰絲法を採用し優良格生絲製造へ進出した爲益々社製蠶種充足の必要に迫られ昭和五年福島蠶種製造所を設立した。爾來順調に發展し年製造高二五〇萬瓦となつた。

姫路蠶種製造所

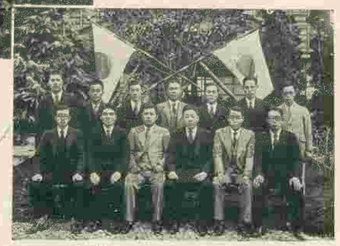
姫路市

社製蠶種の需要激增に伴ひ、中國、四國方面各工場へ配給の蠶種を製造する爲昭和九年設立された。昭和十年迄は採種蠶種の全部を普及團へ輸送して居たが十一年一切の設備を完成して獨立の製造所となつた。高知縣安藝郡、兵庫縣赤穗郡、奈良縣吉野郡に飼育分場を持ち年製造高一五〇萬瓦に及んで居る。

福島蠶種製造所

同上職員

姫路蠶種製造所



同上職員

佐賀蠶種製造所

佐賀縣小城郡小城町

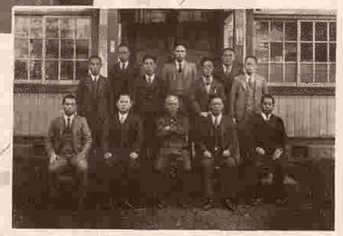
當所の開設は昭和六年一月佐賀縣是蠶業株式會社と片倉製絲との間に於ける設備の賃貸借契約の時に始まる。其の後逐次設備內容を改善整備し、昭和九年には學術研究を目的とする蠶種製造の許可を受けて研究蠶室を新設し、蠶品種の改良及原蠶種製造をも開始した。昭和十四年には原蠶種國家管理法に依る自家用原種製造の免許を受け片倉佐賀原種製造所を兼設した。普通蠶種の年製造高三百萬瓦の設備を有す。

福岡蠶種製造所

福岡縣糟屋郡箱崎町

當所は元大正五年九州蠶種合資會社として設立され大正八年資本金五十萬圓の株式組織となり大正十二年拾萬圓に減資して片倉鳥栖製絲所と十ヶ年の委任經營契約を締結した。昭和八年四月右期間滿了により同會社は解散し、新に資本金五萬圓を以て北九州蠶種株式會社を創立し片倉製絲へ委任經營の契約を爲し昭和十二年十二月之を賃貸借契約に改め十三年四月より福岡蠶種製造所となつた。年製造高二二〇萬瓦である。

佐賀蠶種製造所



同上職員

福岡蠶種製造所

同上職員

沖繩蠶種製造所

同上職員

龍仁蠶種製造所

永興蠶種製造所

同上職員

裡里蠶種製造所

沖繩蠶種製造所

沖繩縣島尻郡眞和志村

大正十五年島栖製絲所長野崎餉次郎（現取締役）渡沖し將來製絲工場設立の豫定を以て那覇市郊外に一萬餘坪を購入し乾燥場を設けた。爾來原料集荷に努めたるも豫定數量に達せざる爲昭和五年一切を普及團に移讓し普及團出張所となつた。更に昭和十三年に至り片倉沖繩蠶種製造所となり專ら原蠶種の飼育製造、及蠶品種の試驗を擔當するに至つた。

永興蠶種製造所

咸鏡南道永興郡洪仁面

北鮮農蠶株式會社を買收昭和四年十二月閉所年製造高三〇萬瓦。

龍仁蠶種製造所

京畿道龍仁郡內四面陽智里

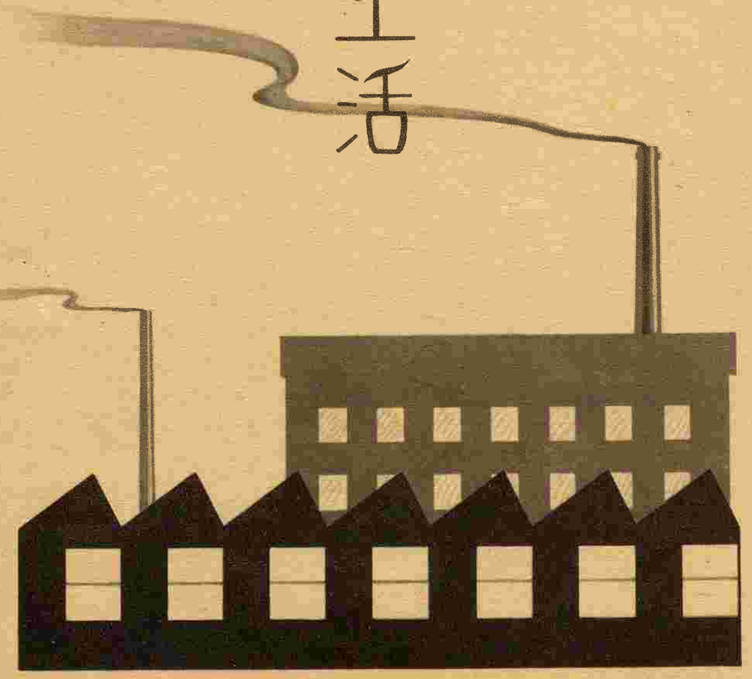
昭和五年四月閉所

裡里蠶種製造所

全羅北道益山郡裡里邑

昭和十二年三月楠田精一經營の事業を買收す。

工場生活



厚生施設

- 社會政策的施設
  - 工場法
    - 工場危害豫防及衛生取締規則
    - 工場附屬寄宿舍取締規則
  - 健康保險法、職員健康保險法
  - 退職積立金及退職手當法
  - 國民體力法
  - 青年學校令
- 厚生福利施設
  - 教育施設
    - 精神教育
      - 祭祀（蠶絲祭、慰靈祭其他）修養講座、修養團
      - 如水會、高德會、善行表彰、勤續表彰
    - 國民教育
      - 私立片倉青年學校
    - 業務教育
      - 製絲講習、蠶業講習、栽桑講習、教婦講習、技術競技會、發明考案表彰
      - 刊行物（考香時報、蠶絲讀本、片倉生絲月報、栽桑時報、栽桑試驗所彙報、蠶業試驗所彙報、試驗所報告）
    - 情操教育
      - 茶道、活花、編物、裁縫、手藝等の講習、雛祭、七夕祭、針供養、和歌俳句其の他
      - 視察旅行、圖書室、展覽會、刊行物（糸の友）
    - 體育
      - 片倉體操、武道、運動會、各種スポーツ施設
    - 營養
      - 食堂の完備、營養食の給與
  - 保險衛生福利施設
    - 保健衛生
      - 片倉館溫泉浴場及慰安所、松原慰安所、湘南倶樂部
      - 健康診斷、豫防注射、診療所及病院經營
    - 共濟施設
      - 從業員利益分配制度、親和會、社友會、罹災塡補制度、慶弔見舞
    - 慰安娛樂
      - 映畫、觀劇、ラヂオ、蓄音器、放送設備、修學旅行、音樂、演藝會
    - 生活改善
      - 寄宿舍、社宅の完備、日用品の配給、被服給與
      - 貯蓄奬勵（貯蓄會、恒心會）家政講習、特設自警團

片倉寮

片倉寮は本社勤務の獨身社員を收容する爲建設された寄宿舍である。中央線吉祥寺驛下車、樹木鬱蒼、幽邃を以て聞ゆる井之頭公園に隣接し、娯樂室、修養室、應接室、浴場、食堂、テニスコート等總べて理想的設備を有し勝れたる環境と共に他に誇る可き近代的施設である。

片倉館温泉浴場

昭和三年御大典紀念と片倉組創立五十年を紀念する爲工費八十萬圓を以て建設された。風光名眉を以て名ある諏訪湖畔の上諏訪町に所在し臺華壯麗なる設備と、四時盡くること無き温湯に浴し冬はスケートに、夏は構内に續く湖畔公園の納凉に或は舟遊び魚釣りに從業員の理想的慰安所として我社の天下に誇る福利施設である。現在財團法人片倉館と稱する。

片倉湘南倶樂部

横須賀線逗子驛下車葉山御用邸に續く南端の海岸に位し北側には縣立公園大楠山を負ひ南側は波靜かにして眺望絶佳なる相摸灣に面し冬暖く夏凉しく理想的海水浴場となつて居る。倶樂部の設備は我社從業員の休養所として隨時利用に委せて居る。

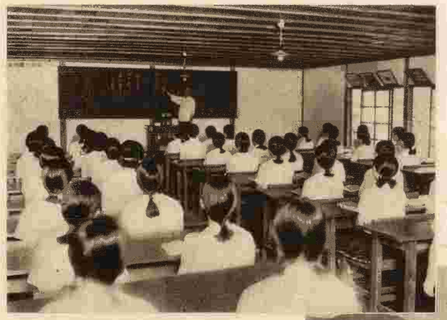
寮倉片

室樂娯寮倉片

場浴泉温館倉片

室浴館倉片

部樂倶南湘倉片
(濟可許部令司塞要)



青年學校授業

青年學校査閲

花　活

縫　裁

青年學校

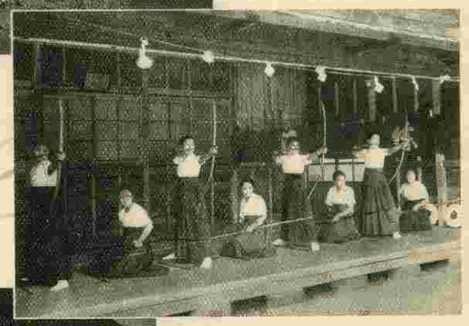
我社は片倉組時代より從業員の教育には常に意を用ひ各種の施設を行つて來た。特に青年學校令の施行を見るや青年訓練所に引續いて各工場共私立青年學校を設立し、國民教育に眞摯なる努力を續けて居る。我社の青年從業員教育方針は、團體精神の訓練、體位の向上、實務の習得に重點を置き以て產業報國の精神に燃ゆる人材の養成に努めて居る。約四萬人の從業員中青年女子の割合は八〇%を越へ而かも此の全部を寄宿舍に收容し居る爲、單に教室内の授業に限らず日常の作業、寄宿舍に於ける生活を通じて絶えず實際に即した教育を行つて居る。

體育

全從業員の八〇％以上を占むる婦人從業者は大部分未婚の青年女子である。彼女等は何れも將來第二の國民の母たる可き重大な使命を帶びて居る。「産めよ、殖せよ」と民族の繁榮を國策とする今日優良なる國民は健全なる母から！　先ず健全なる母を作らねばならぬ。

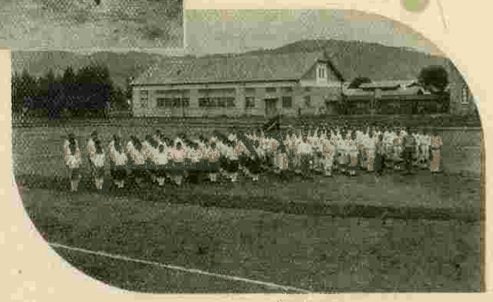
成長期にある青年女子を從業員とする我が社は體育指導專任者と營養士をして絶えず各工場を巡回指導せしめ、製絲作業により偏頗に使用されたる筋肉を矯正する爲營養食の給與と片倉體操を實施して居る。各工場に於ては夫々狀況に應じて各種のスポーツ及武道を奬勵し體位の向上に努めて居る。又地方毎の工場聯合して野球大會、庭球大會等を年中行事として開催し工場相互間の親和と明朗なる氣分の育成を計つて居る。

片倉體操



女子從業員の弓道

從業員の相撲



工場對抗男子野球　女子庭球
式場入職

民謠踊り

ハイキング

演藝大會

慰安

製絲工場は女護ケ島である。從業員の福利施設は女子向本位となるのも亦止むを得ない。日常の作業に、產業報國の誠を捧げた身體の疲れを回復するには營養食と休養で！　心配は無用、手落ちのあらぶ筈も無い。遠く故郷を離れた寄宿舍で懐郷の憂さを紛はすには何より慰安が第一である。彼女達の好むものは、先づ映畫である。各工場共毎月二回位は映畫會を開く。民謠踊り、演藝大會何れも甲乙をつけ難いまでに人氣を集める。夏の夜の盆踊りは「木曾のナー、ナカノリサン……」と時を忘れて東天の白む頃まで踊り拔く。

溫暖な時期のハイキング、旅行も亦樂しい年中行事である。

「今年の旅行は何處かしら？」と旅行のスケヂユールを豫想して噂に彈む頃は彼女等の寄宿生活の中でも苦勞を忘れた最も樂しい一刻なのである。

寄宿舍生活

夜だ靜かに戀ひの夜だ
　思へば樂しい職場の一日
勵む作業にわく血汐
　何時か一つに通ひつゝ
常に高鳴る人の道
　ラララーラ片倉我が力

一日の勤務を終へた靜かな夜
働く者のみが知る愉しい團樂の一刻である。

雛祭り

團樂

休憩時間の散歩

工場庭園

醫療施設

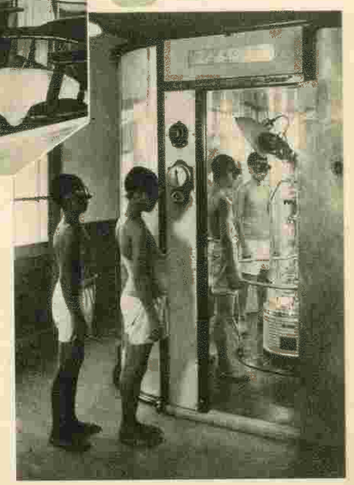
工場從業員の保健衛生施設は遺憾なく整備され、片倉健康保險組合及片倉職員健康保險組合の設立に依つて傷病の醫療休養には何の不安も無い。健康保險組合へ加入資格の無い從業員には親和會の施設がある。

片倉健康保險組合は設立以來社業の伸展と共に年々發展を續け現在支部五一ヶ所組合員三萬七千人を擁して我國屈指の大組合となり着々業績を擧げて居る。

修養機關

從業員修養機關として絲の友、考査時報、蠶絲讀本、栽桑時報等の刊行物を發行し、如水會、高德會等に依つて隨時名士の講演會が行はれて居る。各工場には神社又は佛壇を安置し朝夕の禮拜や祭祀に祖先崇拜の念を涵養してゐる。

工場診療室



紫外線浴室

其

の

他

試驗所の研究品

シルクブロック製品　大宮試驗所に於て研究された絹屑を壓搾して造るシルクブロックは、新工業材料として用途は甚だ多い。

捕鯨用絹ロープ　本社絹製品部の捕鯨用絹ロープは强靱、命中率正確の特徴を有しマニラロープを驅逐して捕鯨事業に不可缺のものとなつた。

昭和育　蠶業試驗所研究の昭和育は防乾紙を應用して水分の發散を防ぎ萎凋防止を施した條桑を以て僅か一齡一回給桑の新時代的養蠶法である。

葉質糖分檢定器　栽桑試驗所研究の葉質糖分檢定器に依れば簡單な檢査法に依つて科學的に桑葉の適熟度を見出し、蠶作の安定を得る事が出來る。

シルクブロック製品

捕鯨用絹ロープ

昭和育の實況

稚蠶用桑葉質檢定器

紐育萬國博覽會

今井社長は紐育桑港萬國博覽會協會長として米國絹業視察團長を兼ね昭和十五年七月三十一日横濱出帆の新田丸にて渡米した。滞米三ヶ月日米國交問題兎角圓滑を缺く折柄民間外交使節として日米親善の爲活躍、又絹業視察團長として米國機業家を歴訪し生絲問題に付き隔意なき意見の交換を遂げ恙無く十一月二十五日新田丸で歸朝された。

飛行機にて紐育へ到着の今井社長
左は出迎への佐藤頼子嬢

紐育萬國博覽會に於ける繰絲實演

スマトラチヨーロツプ片倉農園社宅

同上農園の一部

片倉製絲紡績株式會社　事業概要

一、沿　革

當會社は大正九年三月二十三日資本金五千萬圓（拂込金貳千五百萬圓）を以て創立され片倉組の經營せる製絲並に絹絲紡績の事業の一切を繼承し更に長野縣武井覺太郎及び田中新之助經營の製絲事業を合同したものである。

抑〻片倉組は片倉一族の共同組織に係る匿名組合で明治二十八年設立された。明治十一年六月初代片倉兼太郎翁が信州諏訪郡川岸村天龍川畔に三十二人繰の洋式器械製絲工場同七月共同出荷組合深澤社を設けたるを濫觴とし、爾來拮据經營、次で尾澤金左衞門、林國藏氏等と相諮り開明社を創設し、共同荷造、共同販賣をなし、共同揚返場を設け絲質の統一、品位の整齊を圖り孜々として斯業の改善發達に努め、明治二十三年郡外に松本製絲所、同二十七年三全社を設置以來東京府、埼玉、宮城、福島、山形、愛知、兵庫、鳥取、佐賀、大分、長野縣の壹府十縣及び朝鮮大邱府に亘り工場を設け大正九年株式會社組織に際して

は製絲工場十九ヶ所、設備釜數壹萬壹千九百三拾七釜及び福島縣郡山に絹絲紡績工場を有し一ヶ年生絲製造高三萬八千餘梱、絹絲紡績製品二十七萬斤を算するの盛大を致した。

由來製絲の業たるや經營上に於ける知識經驗と熟練堪能なる技術者とを要するは勿論なれど優良蠶種を提供する蠶種家、優秀なる原料繭を供給する養蠶家と相提携せざれば斯業の改善發達は望み難きを以て玆に生絲需要の趨勢に鑑み蠶種、養蠶、製絲、貿易業者間に氣脈を通じ、且從業者に利益分配の制度を設け、所謂共存共榮、勞資協調の實を擧げ其の慶福を共にし以て時代の要求に順應する計劃を立て、國運興隆の一端に貢獻せんが爲め、片倉組の製絲並に絹絲紡績の事業を廣く世に開放し前記の如く大正九年三月當社の創立を見るに至つたものである。

二、事業の發展

當社創立直後の四月十二日武井氏經營の長野縣武井製絲所、田中氏經營の長野縣須坂二ヶ工場及岐阜製絲所を合流し同五月佐賀縣小城郡是製絲所、同十一年高知縣高知及德島縣鴨島の各製絲所を買收し、次いで松本市の大日本一代交配蠶種普及團を併せ蠶種の製造を兼營し、翌十二年四月紡績事業を獨立せしめ資本金五百萬圓を以て、日東紡績株式會社を

創設し、同十一月株式會社尾澤組經營の長野縣岡谷、埼玉縣熊谷、盛岡市及熊本市所在の各製絲所を合併し資本金五千貳百七拾五萬圓に增資した。大正十五年四月には岐阜縣瑞浪製絲所を買收、昭和二年朝鮮京畿道營たる恩賜授產京城製絲所を繼承し、翌三年朝鮮全州府に全州製絲所、和歌山縣に紀南製絲所、同四年更に朝鮮咸興府に咸興製絲所、同五年廣島縣に、三原製絲所を各々新設した。同八年當社姉妹會社たる埼玉縣武州製絲株式會社を合併して東武製絲所と改稱し、資本金五千三百五拾萬圓に增加した。次いで同十一年十二月日東製絲株式會社の伊達工場外六製絲工場の事業を繼承し經營、翌十二年三月神奈川縣蠶絲興業株式會社を買收し湘南製絲所と改め、同九月富士撚絲工業株式會社を買收之を甲府撚絲工場と改稱して撚絲事業を兼營した。

然るに昭和の初期に於て蠶絲業は困憊萎縮の極に達し之が更生には頗る苦心した。我社は各縣下の有力者並に蠶絲業關係者と協力し以て積極的に不振業態の改善啓發を計り養蠶業助長の爲縣內養蠶家に工場を開放して隔意なき共同の下に共存共榮、勞資協調の實を擧げ、以て地方繁榮と蠶絲業改善指導に貢獻した。斯の如き趣旨の下に設立され我社委任經營となりたる傍系會社は、先に縣是製絲たる長崎製絲株式會社、及薩摩製絲株式會社を始めとし大正十五年片倉江津製絲株式會社及備作製絲株式會社、昭和二年片倉越後製絲株式

會社、同三年松江片倉製絲株式會社、同四年片倉磐城製絲株式會社、多摩製絲株式會社、片倉共榮製絲株式會社等である。更に同四年岩手縣是製絲株式會社の創立に協力して當社盛岡製絲所を參加し、昭和十一年十二月保證責任下伊那生絲販賣購買利用組合の創設に際して長野縣飯田製絲所を讓渡し、同十二年五月宮城縣是共榮蠶絲株式會社の創立に參劃して當社仙臺製絲所を開放する等地方產業開發に資した。

支那事變勃發後、我社は時局の趨勢に鑑み一元的統制形態を以て斯業の合理的經營に當り以て外貨獲得、生產擴充の國策線に順應すべく先に姉妹會社として創設せる關係諸會社を再び同一資本下に合流せしむる事となつた。

昭和十三年先に委任經營の日東製絲株式會社、備作製絲株式會社、片倉越後製絲株式會社の三社を合併し資本金五千八百五拾五萬圓に增額、次いで片倉共榮製絲株式會社を買收し、同十四年十月株式會社富岡製絲所、片倉佐越製絲株式會社を合併、資本金六拾五萬圓を增資した。

翌十五年十月長崎製絲株式會社、薩摩製絲株式會社、松江片倉製絲株式會社、片倉江津製絲株式會社、片倉磐城製絲株式會社、多摩製絲株式會社及岩手縣是製絲株式會社の七社を合併し總資本金六千六百五拾萬圓、製絲工場數六拾二ヶ所設備釜數二萬三百八拾八釜、

年產生絲壹千萬餘斤に及び傍系會社を合すれば製絲工場六拾五ヶ所設備釜數二萬壹千三百三拾八釜、年產額壹千五拾萬斤に達し今や我邦纖維工業界に益〻その地位を高むるに至つた。

三、蠶種の製造

當社は優良生絲の生產と繰絲能率の增進とを圖るには優良なる蠶品種に俟つべきは勿論、之が改良普及は一に全國養蠶組合と提携特約組合を結成して共存共榮を圖り一面合理的製絲經營を劃するの急務たるを洞察し率先して大正三年大日本一代交配蠶種普及團を松本市に設置し一代交雜種の奬勵普及に努め、蠶品種並に一代交雜蠶種に關する試驗研究を行ふと共に苦心慘憺、幾多の犧牲を拂ひ一代交雜蠶種數萬枚を製造し之を養蠶家に配布の上實地試驗を行ひ斯業界に一大衝動を與へた。爾來年を閱すること二拾有餘星霜、一代交雜蠶種は既に天下を風靡し繭質並に生絲品位の向上顯著にして隔世の感あるは洵に欣快に堪へぬ處である。而して大正十一年大日本一代交配蠶種普及團を併合し益〻蠶品種の改良普及と優良原料繭の統一に資せんが爲め、昭和五年七月桑樹に關する試驗研究を專らとし傍ら各工場より實習生を選拔し實務を修得せしむるため八王子に栽桑試驗所を設置、更に普及

團試驗部を獨立して松本市に蠶業試驗所を開設し、栽桑養蠶の指導蠶種肥料養蠶必需用具等の斡旋等を行ひ積極的に特約養蠶實行組合と協力し、更に蠶種製造設備の內容を充實すると共に蠶種製造所を普及團の外沼津、福島、姫路、佐賀、福岡、沖繩、大邱、密陽、永興、裡里、龍仁の拾一ヶ所に設け、更に昭和十四年都城蠶種製造所を新設し、以て顧客へのサービスを滿足せしむるの基礎を固め斯業の一貫的發達向上に努めた。製造年額は實に貳千萬瓦に垂んとするの多きに達し當社製蠶種の聲價は年と共に揚がりつゝある。

四、製品の概要

當社は創立滿二拾周年を迎へ片倉組時代を通算すれば六十有三年を數へ、其の間我邦蠶絲業の啓發指導に當り刻苦經營只管優秀なる生絲の生產に努力し國產振興の一端に寄與せんことを冀ひ、蠶品種の改良統一、優良原料繭の獲得、製絲技術の改善、繰絲機械の改良を行ひ、生絲需要の趨勢をよく洞察して品質優秀なるものを要求するに至るや我社は御法川式多條繰絲機を採用、率先之に對處し研究機關として大宮に試驗所を新設研鑽怠らず以て優良生絲の製造を堅持し遠く海外市場に迄片倉生絲の名聲を博するに至つた。

而して當社は製絲事業經營の多角化を計り併せて蠶絲業發展の助成と絹新用途の開拓策として生絲の外撚絲、油脂原料品、絹及絹毛製品、及**セリシン**定着等の事業に進出し、副蠶絲應用の**シルクブロック**製品、絹製擬革等の研究を行つて居る。

五、生絲の販賣

當社製造生絲は片倉組創業以來横濱生絲問屋に委託賣込を行ひ以て製品の殆ど全部を輸出生絲として供給した。然るに製絲事業一貫的經營の理想から販賣機關設置の必要を認め、海外顧客に直接接觸して需要動向の眞相を把握せんが爲大正十年六月横濱出張所を開設して自家製造生絲の直接販賣を開始した。

就中大正十二年九月一日の關東大震災により生絲貿易一時杜絶し市場の混亂を來すや我が國家經濟の命脈たる斯業の復興は寸刻の猶豫をも許し得ざるを以て生絲の直輸出を企て、震災直後九月二十七日社員を米國に派遣し紐育に出張所を設置し以て之が對策を講じた。

由來我社の生絲は殆ど國際的貿易商品にして近時生絲需要の動向に鑑み超高級品或は優良品の生產に努め之が檢查は先づ工場に於て豫備檢查を行ひ、更に横濱出張所に於て精密なる檢查をなし、更に輸出生絲檢查法による農林省横濱生絲檢查所又は神戸生絲檢查所の第三者格付檢查並に正量檢定を受け大部分は直輸出を行ひ、徹頭徹尾製品の責任を明瞭に

し、紐育出張所との連絡を計り海外需要家に充分の滿足を與ふる方法を採つた。

紐育出張所は逐年取扱數量を增大し玆に根本機構の確立を計り昭和九年二月片倉**エンド・コンパニー・インコーポレーテット**に改め、更に歐洲市場への進出を試み同年一月佛蘭西國里昂市モレール・ジュルネル商會を當社代理店とし以て英佛市場への地盤を築き昨年迄壹萬九千俵の取引を行つた。同十四年六月には上海生絲の販賣を目的として上海出張所を設置した。

當社生產生絲中輸出向は拾萬貳千俵に及び本邦輸出生絲の約貳割强を占め、その內橫濱出張所取扱數量は問屋業としては生絲入荷高年額七萬七千六百餘俵にして橫濱總入荷量の約二割五分强を占め、輸出業務としては約七萬餘俵にして三井物產、三菱商事等に次いで外貨獲得、貿易振興上に寄與しつゝある。

而して內地向生絲販賣機關としては片倉組時代より川岸事務所販賣部及八王子販賣部之に當り近時纖維饑饉による生絲需要の增加に伴ひ次第に販賣高を增して年額二萬二千餘俵を取扱つゝある。

六、當社の施設

一、蠶業施設

(イ) 養蠶組合の指導奬勵
- (一) 蠶業指導員の派遣及び推薦
- (二) 養蠶資金の融通
- (三) 蠶種、蠶具、肥料、桑苗の供給又は斡旋
- (四) 合理的飼育並に桑園の改良指導奬勵
- (五) 稚蠶共同飼育並に稚蠶共同桑園の奬勵
- (六) 補助、奬勵特別奬勵及び表彰賞金の贈呈
- (七) 產繭品評會の開催
- (八) 蠶業講習、講話會の開催
- (九) 栽桑時報の配布

(ロ) 產繭特約取引の改善

一、研究施設

(イ) 大宮試驗所

輓近科學的工業の進出に對し我が國蠶絲業の發展助長を圖る爲、當社は昭和二年以來大宮市に試驗所を設置し斯業の改善發達に盡してゐる。

(ロ) 蠶業試驗所

蠶品種の改良選擇は一に全國特約養蠶組合と提携し共存共榮を圖るのみならず一面合理的製絲經營の先驅となり將た顧客へのサーヴィスを滿足せしむるの要素なるを痛感し昭和五年七月普

及團試驗部を獨立せしめ松本市に蠶業試驗所を開設して斯業の發展向上に努めてゐる。

(ハ) 栽桑試驗所

桑樹に關する試驗研究を專らとし傍ら各工場より實習生を選拔し栽桑に關する研究、實務の修得を圖る爲、昭和五年七月東京府下川口村に栽桑試驗所を設置し蠶絲業の發展に寄與してゐる。

一、從業員福利施設

(イ) 從業者勤續表彰制度
(ロ) 從業者利益分配制度
(ハ) 恒心會及貯蓄會制度
(ニ) 善行表彰制度
(ホ) 親和會及社友會
(ヘ) 病院及診療所經營
(ト) 片倉館溫泉慰安所及湘南倶樂部
(チ) 體育衞生施設其他慰安娛樂施設

一、從業員教育施設

(イ) 片倉蠶業講習會
(ロ) 栽桑講習會
(ハ) 製絲講習會
(ニ) 教婦養成所
(ホ) 私立片倉青年學校

昭和十年四月青年學校令公布と同時に我社及傍系製絲會社各工場に私立片倉青年學校を設立し同令に依つて青年子女從業者に實務的教育を施し其の數既に六拾二校に及び着々教育の實績を擧げるに至つた。

(ヘ) 雜誌「絲の友」及「考査時報」の配布
(ト) 如水會及高德會

一、片倉健康保險組合

一、片倉職員健康保險組合

七、受賞

大正十年	於勸業博覽會	名譽大賞金牌
大正十一年	於東京平和博覽會	名譽大賞牌
大正十四年	於神戸絹業博覽會	名譽金賞牌

大正十五年	於米國獨立百五十年記念費府萬國博覽會	名譽賞牌	
同　年	於産業文化博覽會	特別金賞牌	
昭和二年	於東亞勸業博覽會	名譽賞牌	
同　年	於全國産業博覽會	名譽賞牌	
昭和三年	於大禮記念國産振興東京博覽會	名譽大賞牌	
同　年	於大禮記念京都大博覽會	國産優良賞	
同　年	於東北産業博覽會	優良國産金牌	
昭和四年	於朝鮮施政二十年記念博覽會	金賞牌	
昭和五年	於白耳義獨立百年記念リエージ萬國博覽會	名譽金牌	
昭和十二年	於名古屋大平洋平和博覽會	名譽大賞牌	
昭和十三年	於朝日新聞社主催代用品發明考案懸賞募集出品「絹無音齒車」	金賞牌	
		一等賞	

八、當社の現況

一、本店所在地　東京市京橋區京橋三丁目二番地四

一、資本金　金六千六百五拾萬圓

一、諸積立金　金壹千九百萬圓

一、會社所有地　壹百貳拾參萬餘坪（外ニ傍系會社分　壹千七百餘坪）

一、建物延坪數　參拾七萬五千餘坪（〃　壹萬參千餘坪）

一、製絲工場　六拾貳ヶ所（〃　三個所）

一、撚絲工場　壹個所

一、設備釜數　貳萬參百八拾八釜（〃　九五〇釜）

一、從業員數　參萬八千餘人（〃　壹千五百餘人）

一、試驗所　大宮、松本、八王子ノ參個所

一、蠶種製造所　一代交配蠶種普及團外拾貳個所

一、醬油釀造所　壹個所

一、出張所　川岸、横濱、大阪、紐育、上海外數十個所

一、農園　スマトラ、チョロツプ、片倉農園

一、生産品

(イ)生絲　拾萬餘俵（外ニ傍系會社分　五千俵）

(ロ) 副蠶品　八百五拾餘萬圓

(ハ) 蠶　種　壹千七百萬瓦　（〃　四拾萬圓）

（外ニ委託蠶種　五百萬瓦）

(ニ) 醬　油　壹　千　石

九、當社の役員

取締役會長　片倉兼太郎

取締役社長　今井五介

取締役副社長　片倉勝衛

常務取締役　片倉武雄

取締役　武井覺太郎

同　片倉直人

同　林清夫

取締役　野崎熊次郎

同　片倉方平

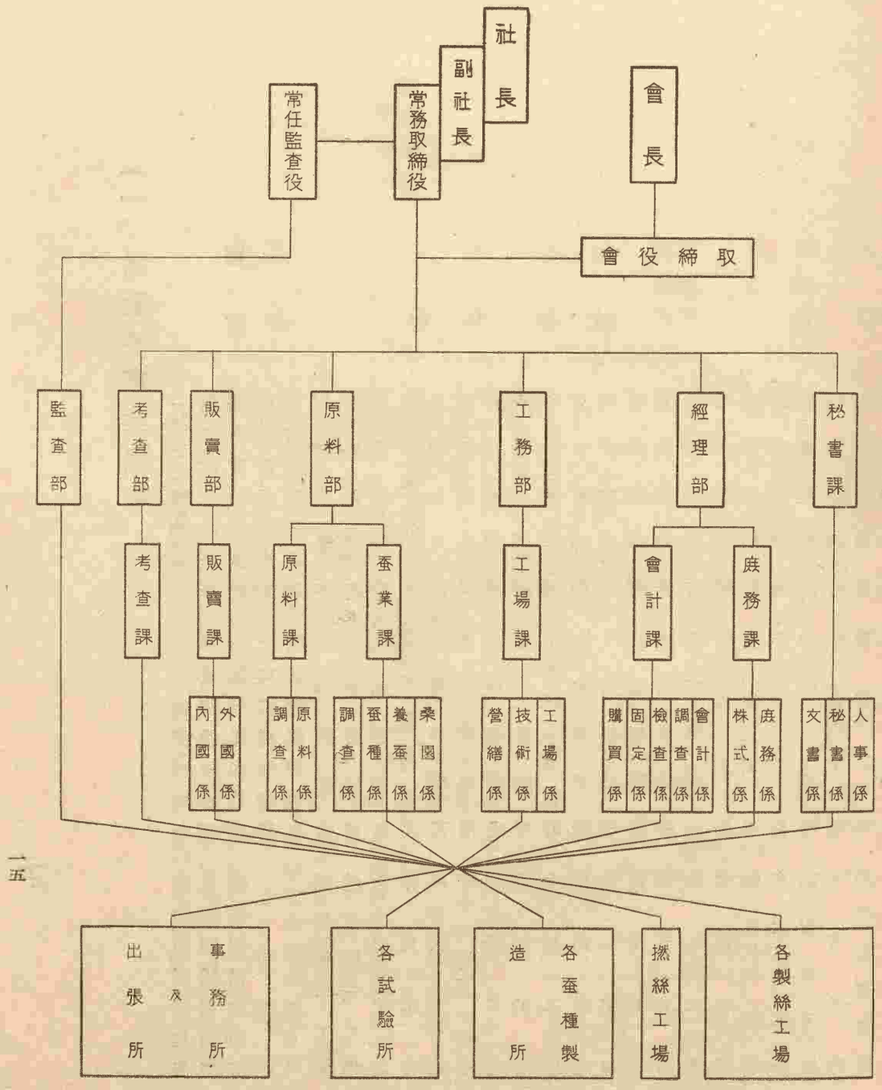
同　中澤正英

同　今井五六

常任監査役　根橋清二

監査役　尾澤金一

一〇、業務系統圖



二、當社の事業組織

片倉製絲紡

- 直係事業
  - 蠶種
    - 一代交配蠶種普及團
    - 沼津蠶種製造所　佐賀蠶種製造所
    - 福島蠶種製造所　都城蠶種製造所
    - 姫路蠶種製造所　沖繩蠶種製造所
    - 福岡蠶種製造所　大邱蠶種製造所
    - 龍仁蠶種製造所　裡里蠶種製造所
    - 永興蠶種製造所
    - 密陽蠶種製造所
  - 製絲
    - 川岸製絲所　越後第一工場
    - 平野製絲所　姫路製絲所
    - 尾澤製絲所　三原製絲所
    - 下諏訪製絲所　越後第二工場
    - 高知製絲所　岡山工場
    - 松本製絲所　高知佐川工場
    - 田中製絲所　作州工場
    - 武井製絲所　宇佐製絲所　鴨島製絲所　多摩工場
    - 八王子製絲所　大分製絲所　平工場
    - 八王子製絲所湘南分工場　盛岡工場
    - 大宮製絲所　鳥栖製絲所
    - 石原製絲所　高田工場
    - 熊谷製絲所　熊本製絲所　小城郡是製絲所　千厩工場
    - 東武製絲所　大邱製絲所　福岡工場
    - 富岡製絲所　京城製絲所　松江工場
    - 岩代製絲所　全州製絲所　江津工場
    - 兩羽製絲所　諫早工場
    - 愛知製絲所　安積工場　鹿兒島工場
    - 岐阜製絲所　美濃工場　宮之城工場
    - 瑞浪製絲所　和田山工場　志布志工場
    - 紀南製絲所　江見工場　吉末工場
    - 上井製絲所　愛媛工場　能登舟製絲所
    - 都城工場
    - 咸興製絲所　伊達工場
    - 島原工場　雲仙工場

績株式會社

- 撚絲
  - 甲府撚絲工場
- 試驗所
  - 試驗所
  - 蠶業試驗所
  - 栽桑試驗所
- 事務所出張所
  - 川岸事務所
  - 横濱出張所
  - 大阪出張所
  - 紐育出張所
  - 上海出張所
  - リヨン代理店
  - チヨロツプ片倉農園
- 其他
  - 醬油部
  - 外出張所數十餘箇所
- 蠶種
  - 九州蠶種株式會社…資本金五萬圓　福岡市外箱崎町
  - 佐賀縣是蠶業株式會社…同　拾五萬圓　佐賀縣小城郡小城町
  - 同　壹百貳拾萬圓　仙臺市東八番町（仙臺工場・仙南工場・仙北工場）
- 製絲
  - 宮城縣是共榮蠶絲株式會社
- 關係事業
  - 其他
    - 日東紡績株式會社…資本金　貳千九百六拾萬圓　福島縣福島市外杉妻村
    - 日華興業株式會社…同　貳百五拾萬圓　中華民國上海
    - 片倉米穀肥料株式會社…同　貳百八拾萬圓　東京市京橋區京橋三丁目二番地
    - 川岸精練株式會社…同　拾萬圓　長野縣諏訪郡川岸村
    - 富士製藥工業株式會社…同　拾萬圓　藤澤市辻堂
    - 三全商事株式會社…同　拾萬圓　長野縣諏訪郡川岸村
    - 關東商事株式會社…同　拾萬圓　東京府南多摩郡小宮町
    - 大有化學工業株式會社…同　五拾萬圓　東京市京橋區京橋三丁目二番地

編輯後記

◇「片倉製絲紡績株式會社二十年誌」編纂資料として蒐集した寫眞は其の數三千有餘枚に達し、之を二十年誌に悉く收錄することは紙數に制限があるので到底不可能である。而しこの中には割愛するに忍びない寫眞もあり、大部分が記錄寫眞として保存したいもの許りである。寫眞は歷史を語る生きた資料たるに鑑み之を保存する爲に記念事業として「創立二十年記念寫眞帖」を編輯し、會社從業員並に會社と密接なる關係方面へ配布する事にした。

◇ 此の寫眞帖編輯の計畫が決定したのは十一月八日である。いざ帖に纏るとなると補足を要するものもあり、修正、組合せの工夫は勿論成可く良い物にし度いのは人情である。あれも入れ度い、こうもしたいと慾には限りが無いのに日數が少なく編輯は色々の事情で制約され思ふ樣には行かなかつたが出來るだけ最大限に收錄した積りである。

◇ 編輯に當つて最も困難を感じたのは用紙である。寫眞帖に要する高級紙の入手には尠からず苦勞した。充分とは行かぬが曲りなりにも責をふさぐだけのことは出來た。

次の困難は防牒の見地から編輯上に多大の制限を受けた事である。幾多優秀なる寫眞を持乍ら代作で補はねばならなかつた個所は夥しい數に達した。全然揭載不能の爲割愛の餘儀無きに至つたものも尠くない。

◇ 編輯の方針としては寫眞を以て片倉の生立ちより會社の現況迄を一目瞭然たらしむ可く努めた。而し前述の如き事情により全體としての調子を眺た時尙至らざるの多きを思ふ。此の種の寫眞帖はともすれば無味單調となり易いので全體としての潤ひを附ける爲には寫眞、解說、編輯共に相當の苦心を拂つた積りである。寫眞收錄の範圍も要所を落すこと無き樣努めたので解說文と相俟つて、各位の胸中に聊かたりとも溫故知新の情を涌かし得れば編者の本懷とする處である。

◇ 編輯を終つて出來上つた寫眞帖を通覽した時大片倉の偉容に驚異を感ずると共に、垣外の寫眞と思ひ合せて今昔の感に堪へない。寫眞其のまゝを殘すところに意義があり、大片倉の偉容は平面的には示されたが立體的には說明の足らぬ憾無きを得ない。見る人の心に依つて立體的解釋がして欲しいと思ふ。

◇ 本寫眞帖の出版は創立二十年の記念たると共に紀元二千六百年の佳き記念である。世は擧げて新體制に趣く時蠶絲業の再編成も實現せんとして居る。本寫眞帖はあらゆる意味に於て曠古の記念たることを思ふ。（編輯委員）

昭和十六年二月七日印刷
昭和十六年二月十二日發行
【非賣品】

編輯兼發行者　東京市京橋區京橋三丁目二番地四　片倉製絲紡績株式會社考査課
右代表者　東京市京橋區京橋三丁目二番地四　中川良輔
印刷者　東京市王子區神谷町一丁目四八二番地　吉田了太
印刷所　東京市王子區神谷町一丁目四八二番地　東京印刷株式會社

群馬県立図書館
0497109-9